島本町文化財調査報告書

第 9 集

平成17年度都市計画道路桜井駅跡線（駅前広場）整備に伴う
桜井駅跡遺跡発掘調査概要報告

平成18年 3 月

島本町教育委員会

序　　文

島本町では、先人たちが大切に遺してきた数多くの文化財の存在が周知されています。これらの文化財を守り、後世に正しく伝えることは現代を生きる我々の責務であります。教育委員会では、埋蔵文化財についてもその保護と周知を行うとともに、未だ遺跡の確認されていない地域での調査も実施し、新たな埋蔵文化財の発見にも努めております。

本書は、平成17年度都市計画道路桜井駅跡線（駅前広場）整備に伴い行なった、桜井駅跡遺跡発掘調査の成果を報告するものであります。

調査にあたりましては、多大なご指導ご協力を賜りました関係諸機関の皆様には、深く感謝しお礼申し上げますとともに、本町の今後の文化財保護行政に対し、変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年３月

島本町教育委員会

教育長　日高久和

例　　言

1．本書は、平成17年度都市計画道路桜井駅跡線（駅前広場）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査として、大阪府教育委員会事務局文化財保護課の指導のもと、島本町教育委員会が実施した、桜井駅跡遺跡発掘調査調査報告書である。

2．調査は、島本町教育委員会事務局社会教育課嘱託職員中津　梓を担当者とし、平成17年５月10日に着手し、平成18年３月31日に本書の刊行をもって完了した。

3．調査及び整理作業にあたり、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。（五十音順）

【調　査　員】　久保直子、坂根　瞬

【調査補助員】　秋月俊也、岩塚祐治、成瀬光一、藤野好博、松村祐香、向井佑介、山口耕司、山本秀樹、吉村光子、鷲田紀子

4．本書の執筆は中津が行い、作成・編集は中津、久保、坂根、吉村が行なった。

5．現地作業及び整理作業においては、下記の関係各機関ならびに方々には貴重なご指導ご教示を賜った。記してここに感謝の意を表します。（敬称略、五十音順）

大阪府教育委員会事務局文化財保護課、財団法人長岡京市埋蔵文化財センター、久保哲正（京都府教育庁指導部文化財保護課）、小森俊寛（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）、大洞真白（京都府八幡市教育委員会事務局社会教育課）、菱田哲郎（京都府立大学）

凡　　例

1．本書に用いた標高は、東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ．）を基準とした数値である。方位は、国土座標第Ⅵ系における座標北である。

2．土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第12版を使用した。

3．遺構記号については、以下の通りである。

ＳＤ：溝　　ＳＥ：井戸　　ＳＫ：土坑

ＳＸ：性格不明遺構　　Ｐ：ピット

目　　次

序　文
例　言
凡　例
Ⅰ　周辺の環境 ---------- 1
　　地理的環境
　　歴史的環境
Ⅱ　調査の概要 ---------- 4
（1）調査区北半における調査の概要 ---------- 8
　1．検出遺構 ---------- 8
　2．出土遺物 ---------- 13
（2）調査区南半における調査の概要 ---------- 19
　1．検出遺構 ---------- 20
　2．出土遺物 ---------- 27
Ⅲ　まとめ ---------- 32

挿図目次

第1図　島本町内文化財分布図
第2図　調査地位置図（1/2000）
第3図　調査区北半　全体図（1/120）
第4図　調査区北半　北壁・東壁土層断面図（1/120）
第5図　ＳＥ124平面図・断面図（1/30）
第6図　ＳＥ118平面図・断面図（1/30）
第7図　ＳＥ174平面図・断面図（1/30）
第8図　ＳＥ211平面図・断面図（1/20）
第9図　ＳＸ300平面図・断面図（1/30）
第10図　道路遺構部断割断面図（1/80）
第11図　ＳＥ118出土遺物実測図（1/4）
第12図　ＳＥ174出土遺物実測図（1/4）
第13図　ＳＥ174出土弥生土器実測図（1/4）

第14図　ＳＸ217出土木製品実測図（1/4）
第15図　ＳＥ211井戸瓦拓影（1/4）
第16図　ＳＸ300出土石臼実測図（1/4）
第17図　包含層出土遺物実測図（1/2・1/4）
第18図　調査区南半　全体図（1/120）
第19図　調査区南半　東壁土層断面図（1/120）
第20図　大型柱列平面図・断面図（1/40）
第21図　ＳＤ544平面図・断面図（1/30）
第22図　ＳＥ543平面図・断面図（1/30）
第23図　ＳＥ560・ＳＫ630断面図（1/40）
第24図　ＳＫ575平面図・断面図（1/10）
第25図　ＳＸ530断面図（1/40）
第26図　ＳＫ553平面図・断面図（1/20）
第27図　道路遺構部断割断面図（1/80）
第28図　大型柱列出土遺物実測図（1/4）
第29図　ＳＤ544出土遺物実測図（1/4）
第30図　ＳＥ543出土遺物実測図（1/4）
第31図　ＳＫ630出土遺物実測図（1/4）
第32図　ＳＫ575出土遺物実測図（1/4）
第33図　ＳＫ553出土遺物実測図（1/4）
第34図　ＳＸ530出土遺物実測図（1/4）

図版目次

図版１　調査区北半全景・ＳＸ300
図版２　弥生土器出土状況・ＳＥ118
図版３　ＳＥ174・ＳＥ211
図版４　調査区南半全景・ＳＥ543
図版５　ＳＫ553・ＳＤ544
図版６　大型柱列（Ｐ513・Ｐ521）
図版７　大型柱列（Ｐ574・Ｐ551）
図版８　ＳＫ575

図版９　ＳＥ118・ＳＥ174・ＳＥ211・ＳＸ217・ＳＸ300・包含層出土遺物

図版10　ＳＤ544出土遺物

図版11　ＳＫ553・大型柱列（Ｐ551・Ｐ574）・Ｐ581出土遺物

図版12　ＳＫ630出土遺物

図版13　ＳＫ630出土遺物

図版14　ＳＥ543・ＳＸ530出土遺物

図版15　ＳＫ575出土遺物

Ⅰ　周辺の環境

地理的環境

島本町は大阪府の北東端に位置し、京都府との府境に接する面積16.78㎢の町である。北は京都市西京区、京都府長岡京市、北東は京都府大山崎町、東南は京都府八幡市、南は大阪府枚方市、西は大阪府高槻市に隣接する。町域の東南部で、桂川、木津川、宇治川の三川が合流して淀川となり、南西に流れ大阪湾へそそぐ。この地域で淀川が造り出す台地上の地形は、北側の天王山山塊と南側の生駒山地の北端となる八幡市の男山丘陵とを分ける山崎狭隘部と呼ばれる。また、島本町内を平城京や平安京と大宰府を連絡する山陽道（江戸時代には西国街道として継承される）が通過しており、このような地理的環境は古くから島本町の歴史の発展を支える重要な条件となってきた。また、自然環境の面にも恵まれ、近年大阪府の天然記念物に指定された「若山神社のツブラジイ林」があり、「大沢のスギ」「尺代のヤマモモ」をはじめ、豊かな自然が残されている。

歴史的環境

現在島本町内では、埋蔵文化財包蔵地として17の遺跡が周知されている。山崎西遺跡で国府型ナイフ形石器が採集されている[1]ことから、島本町域では旧石器時代の終わり頃から人々が生活しはじめたと考えられる。そして、越谷遺跡で縄文・弥生時代の土器が出土している[2]ことから、狩猟・採集の時代から集団で稲作を始める頃へと、人々の生活が途切れることなく営まれたことが想像される。また、弥生土器が表面採集されている桜井遺跡も、弥生時代後期の高地性集落であったと考えられているが、以前行われた試掘調査では遺構・遺物の存在がなかったため、その性格については不明である。古墳時代では、桜井地区の源吾山遺跡と神内古墳群から古墳の副葬品であろう土器や鉄器が採集され、後に行われた調査時にも出土している[3]。これは、付近の山麓に古墳が存在していたこと、またその近辺に古墳時代、集落があったことを示すものである。

奈良時代になると、山崎の鈴谷には瓦窯が造られた。この鈴谷瓦窯は、奈良の東大寺に関連する窯であるとされており、昭和29年の町営住宅造成時に２基発見されている。また、水無瀬川を挟んだ対岸には、東大寺の管轄する荘園「水無瀬荘」が造営された。正倉院に伝わる『摂津職嶋上郡水無瀬荘図』に、当時の水無瀬荘の様子が描かれている。奈良時代も終わり頃となり、都が平城京から長岡京、そして平安京に遷るにつれ、島本町はその水陸両方の利便性から交通上重要な位置を占めるようになった。山崎津推定地は、京都府の大山崎ではなく、島本町内の淀川西岸北部にあたり、山崎津は長岡京や平安京の外港的性格の川港として発展する。『延喜式』及び『土佐日記』・『更級日記』により、山崎駅や山崎津の様相を見て取れる。また、この地方は天皇や貴族たちの遊覧の地となり、桓武天皇や嵯峨天皇が頻繁に訪れた。中でも後鳥羽上皇は、鎌倉時代に水無瀬離宮を造営し、遊興の時を過ごしたと言われている。なお近接地の広瀬遺跡は、同時代

の遺跡であり出土遺物などからは、山崎津と直接的な関連を有しながら発展した遺跡であったと推測される[4]。

今回の発掘調査地の北側に隣接する国指定史跡桜井駅跡については、南北朝動乱期である延元元年（1336)、楠木正成が湊川の戦いのため兵庫へ下向する途中、嫡子正行を河内に帰すべく、桜井駅にて遺訓をし訣別したと『太平記』に記されている。大正10年（1921）３月、国史跡に指定された。

註＞

１）島本町史編さん委員会編　1975「第二章　第一節　最初のあしあと」『島本町史　本文編』

２）名神高速道路内遺跡調査会　1997『越谷遺跡他発掘調査報告書』「名神高速道路内遺跡調査会調査報告書」第２輯

３）ａ島本町史編さん委員会編　1975「第二章　第三節　古墳時代」『島本町史　本文編』
　ｂ註２）

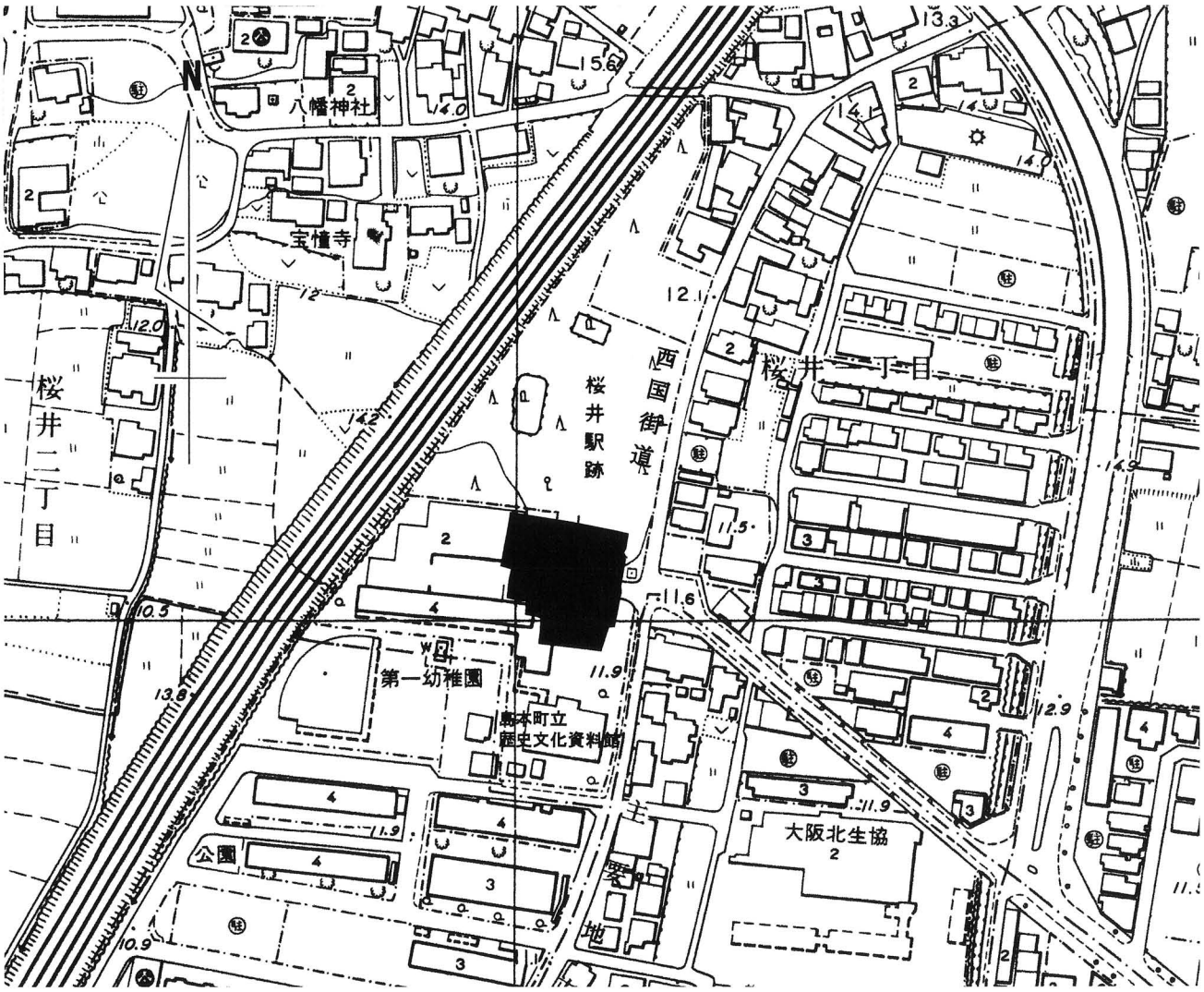
４）島本町教育委員会　1991『島本町埋蔵文化財調査報告書』第１集

第１図　島本町内文化財分布図（1/25000）

1. 山崎古墓　2. 山崎東遺跡　3. 山崎西遺跡　4. 鈴谷瓦窯跡　5. 御所ノ平遺跡　6. 水無瀬荘跡
7. 広瀬遺跡　8. 水無瀬離宮跡　9. 桜井御所跡　10. 桜井遺跡　11. 桜井焼窯跡　12.（伝承地）待宵小侍従墓
13. 桜井駅跡遺跡　⑬. [国] 史 桜井駅跡（楠木正成伝説地）　14. 御所池瓦窯跡　15. 越谷遺跡　16. 神内古墳群
17. 源吾山古墳群　18. 広瀬南遺跡　19. [国] 重文 水無瀬神宮茶室・客殿　20. [府指] 有文 関大明神社本殿
21. 西国街道　22. [府指] 天 若山神社ツブラジイ林群　23. [府指] 天 尺代のヤマモモ　24. [府指] 天 大沢のスギ

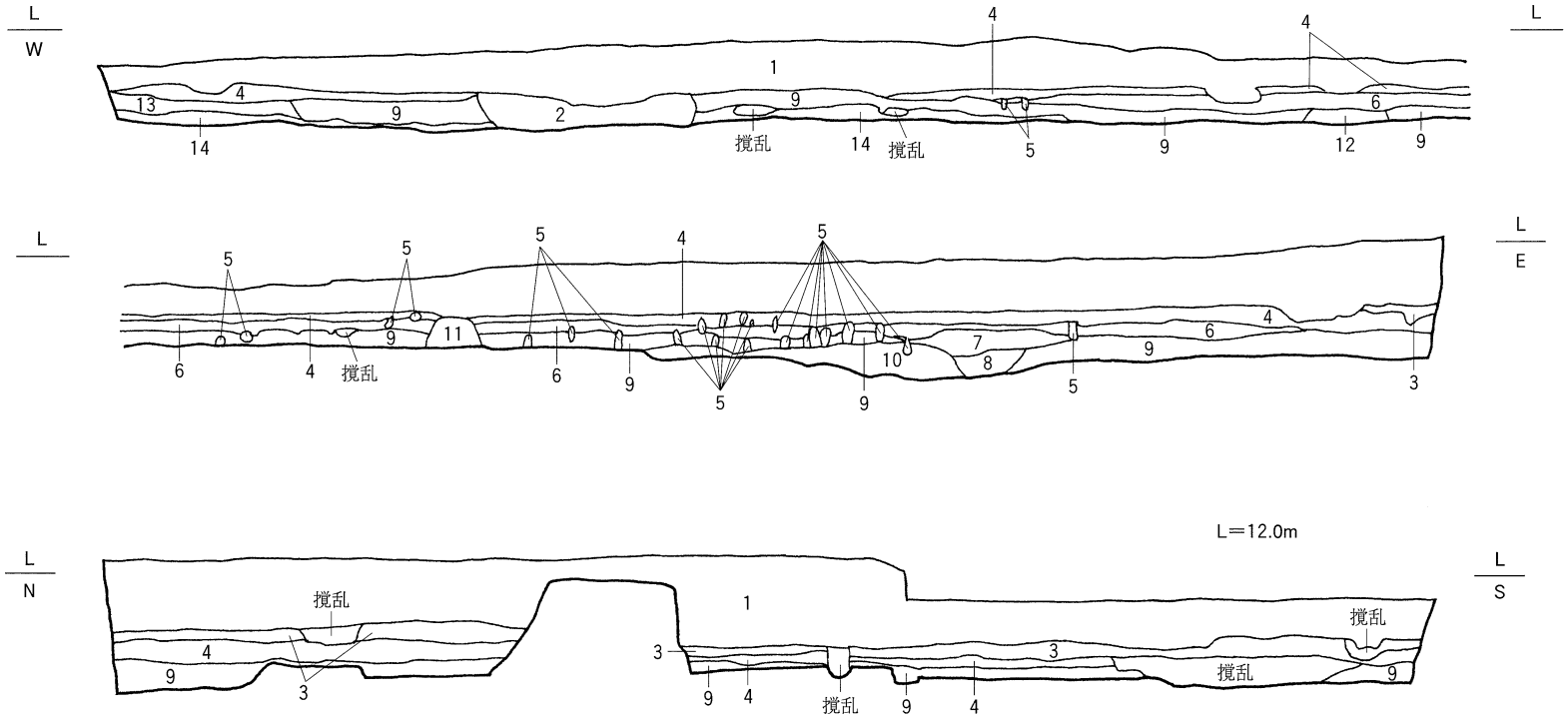
Ⅱ　調査の概要

この調査は、平成17年度都市計画道路桜井駅跡線（駅前広場）整備に伴い行なったものである。調査地は、国史跡桜井駅跡の南側に隣接する面積約1,600㎡の土地であり、桜井駅跡遺跡の包蔵地となっている。しかし、これまで史跡範囲を含めて当遺跡内では本格的な調査が行われていない。今回の発掘調査においては、古代及び中世における遺構面を検出し、それらの歴史的様相を正確に把握して、記録することを主な調査目的としている。調査は、現代表土層および造成土層を重機で掘削し、それより下層の堆積土層を人力で一層ごとに掘削し、遺構面および遺構の検出や遺構の掘り下げ調査を進めるという、一般的な発掘調査手順で行なった。なお、土置き場と車の進入路等確保のため、調査区を北半・南半に二分して北半から調査を開始し、その終了後に南半の調査を行なった。発掘調査の記録は、調査区の平面（S＝1：100及び1：20）・土層断面（S＝1：20）の図化、各遺構平面・断面の図化（S＝1：10）、写真撮影等を行なった。



第２図　調査地位置図（1/2000）

第３図　調査区北半　全体図（1/120）



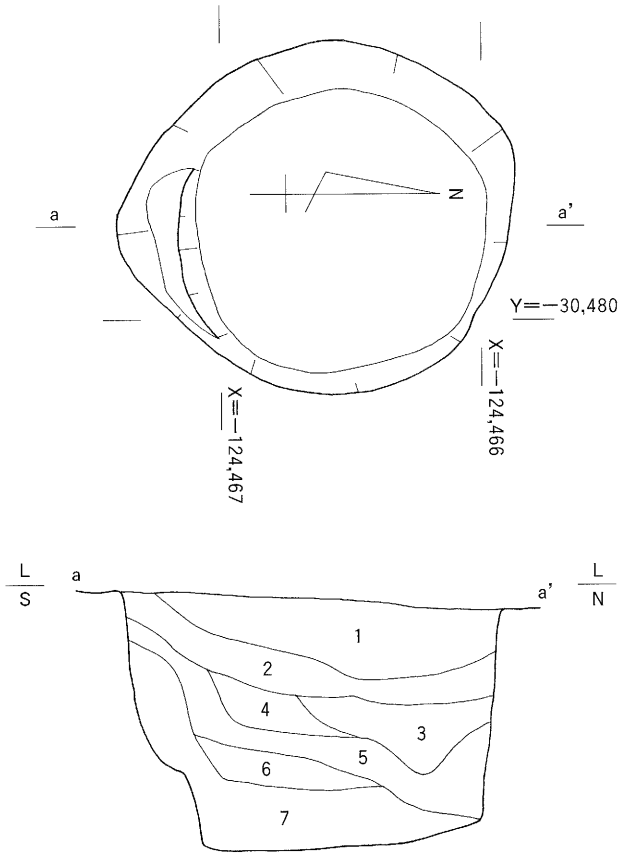
1．盛土
2．Hue5Y　4/1　灰色粘質シルト鉄分含む（瓦井戸埋土）
3．Hue5Y　6/1　灰色砂質土鉄分含む
4．Hue2.5Y　6/2　灰黄色砂質土
5．Hue5Y　6/1　灰色シルト
6．Hue2.5Y　5/1　黄灰色シルト（1cm程度のレキ少含）
7．Hue5Y　7/2　灰白色シルト（5～10cmの河原石多含）
8．Hue2.5Y　5/3　黄褐色砂（1～5cm程度の河原石多含）
9．Hue10YR　6/8　明黄褐色粘質土鉄分多含
10．Hue5Y　4/2　灰オリーブ砂（1～5cm程度の河原石多含）
11．Hue10YR　4/2　灰黄褐色粘質土（1～5cmのレキ含む）
12．Hue10YR　5/1　褐灰色粘質土鉄分含む
13．Hue10Y　7/1　灰白色砂（1～3cmのレキ多含）
14．Hue5Y　6/2　灰オリーブ土

0　10m

第4図　調査区北半　北壁・東壁土層断面図（1/120）

（1）調査区北半における調査の概要

調査区北半における調査については、平成17年５月10日から同年６月27日までの約２ヶ月間にわたって行なった。北半・南半ともに基本層序は、現代表土層（１層）、田の床土（３層）、床土的な性格を持つ近世期包含層（４層）、中世期包含層（９層）となっている。堆積土は灰色土がベースとなり、砂質やシルトの層がその大半を占める。北壁では瓦組の井戸であるＳＥ211の掘り方（２層）や、近世期の柵状の痕跡（５層）、中世期の溝（７・８層）などを確認した。今回の面的な調査は、中世期包含層直上の　中世遺構面において行なった。なお、近世期包含層の掘削時には、若干の近世期遺物及び中世期の土師器皿などが出土した。



1．Hue2.5Y　6/6　明黄褐色粘質土礫混じり
2．Hue2.5Y　6/6　明黄褐色粘質土砂混じり
3．Hue2.5Y　5/4　黄褐色粘質シルト鉄分混じり
4．Hue2.5Y　5/4　黄褐色シルト鉄分混じり
5．Hue5Y　5/1　灰色粘質土
6．Hue5Y　5/1　灰色シルト鉄分混じり
7．Hue5Y　6/1　灰色粘砂土礫混じり

0　2m

第５図　ＳＥ124平面図・断面図（1/30）

１．検出遺構

調査区北半における主な検出遺構としては、石組や瓦組などの素材、構築方法及び使用時期のそれぞれ異なる５基の井戸や、集石遺構、道路状遺構などが挙げられる。それぞれの遺構の時期については、出土遺物から見て室町時代後半から江戸時代後半までに該当すると考えている。また、遺構に伴わない包含層内出土遺物の中には、今回の調査遺構面の相当時期よりも1000年以上さかのぼる、弥生時代や古墳時代の土器なども含まれている。それぞれの詳細について、以下に述べていく。

ＳＥ124（第５図）

調査区北端付近で検出した、掘り方の直径約1.3m、深さ約１ｍの素掘り井戸である。後述の石組の井戸と比較すると、井戸底が約１ｍ浅く、湧水の具合も顕著ではないことから、恒常的な使用のあった可能性は低いと考えられる。出土遺物は土師器皿が少量程度であった。

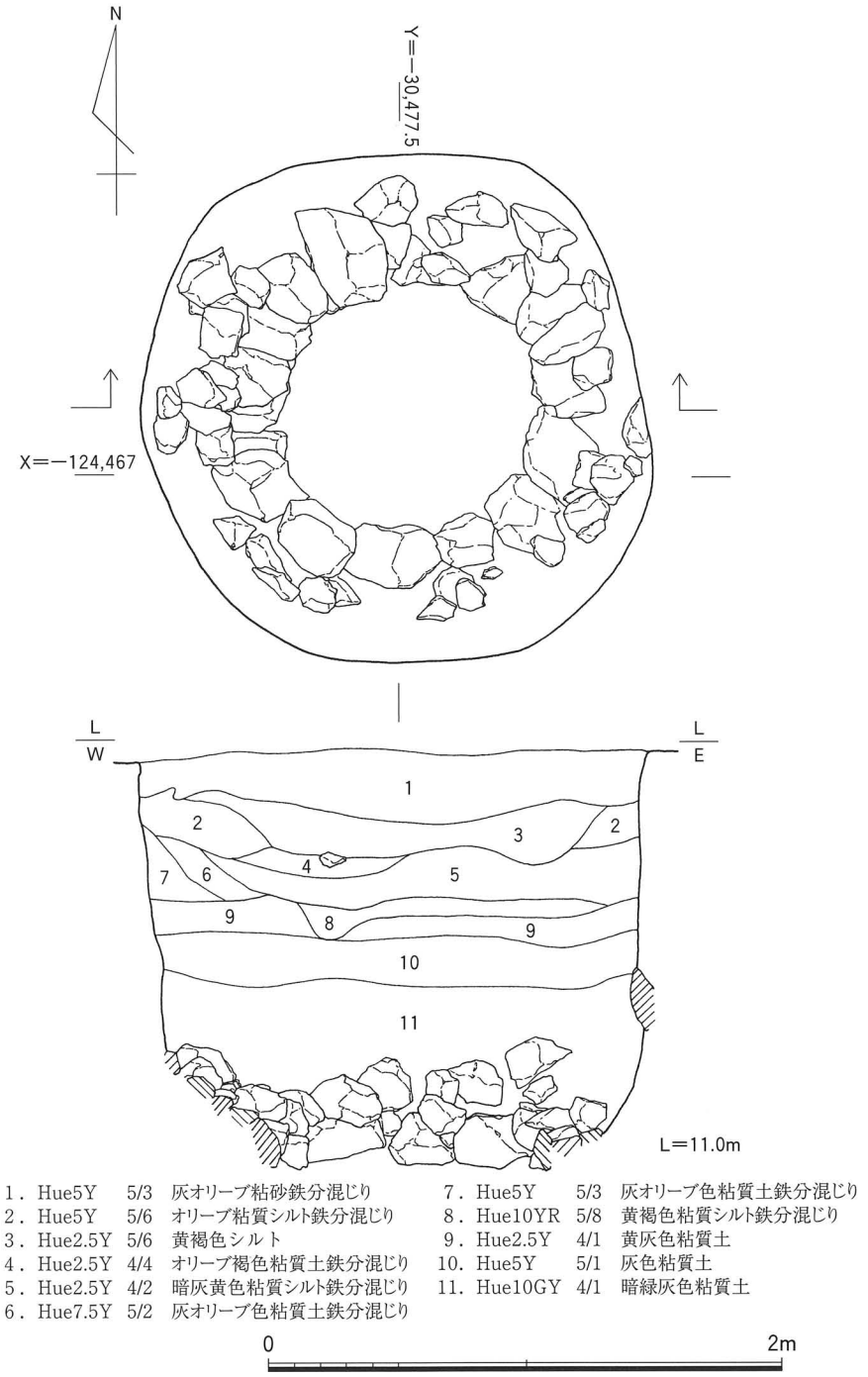
ＳＥ118（第６図・図版２）

調査区北端付近で検出した、石組の井戸枠を持つ井戸である。掘り方は若干六角形のように見える、やや角を残した円形であり、直径・深さはともに約２ｍである。石組自体の残存状況は非常に悪く、底部より一段あるいは二段を残すのみである。

井戸の底部付近の井戸枠埋土内より、曲げ物と漆塗りの椀が出土した。その他の出土遺物は、土師器皿・不明石製品である。

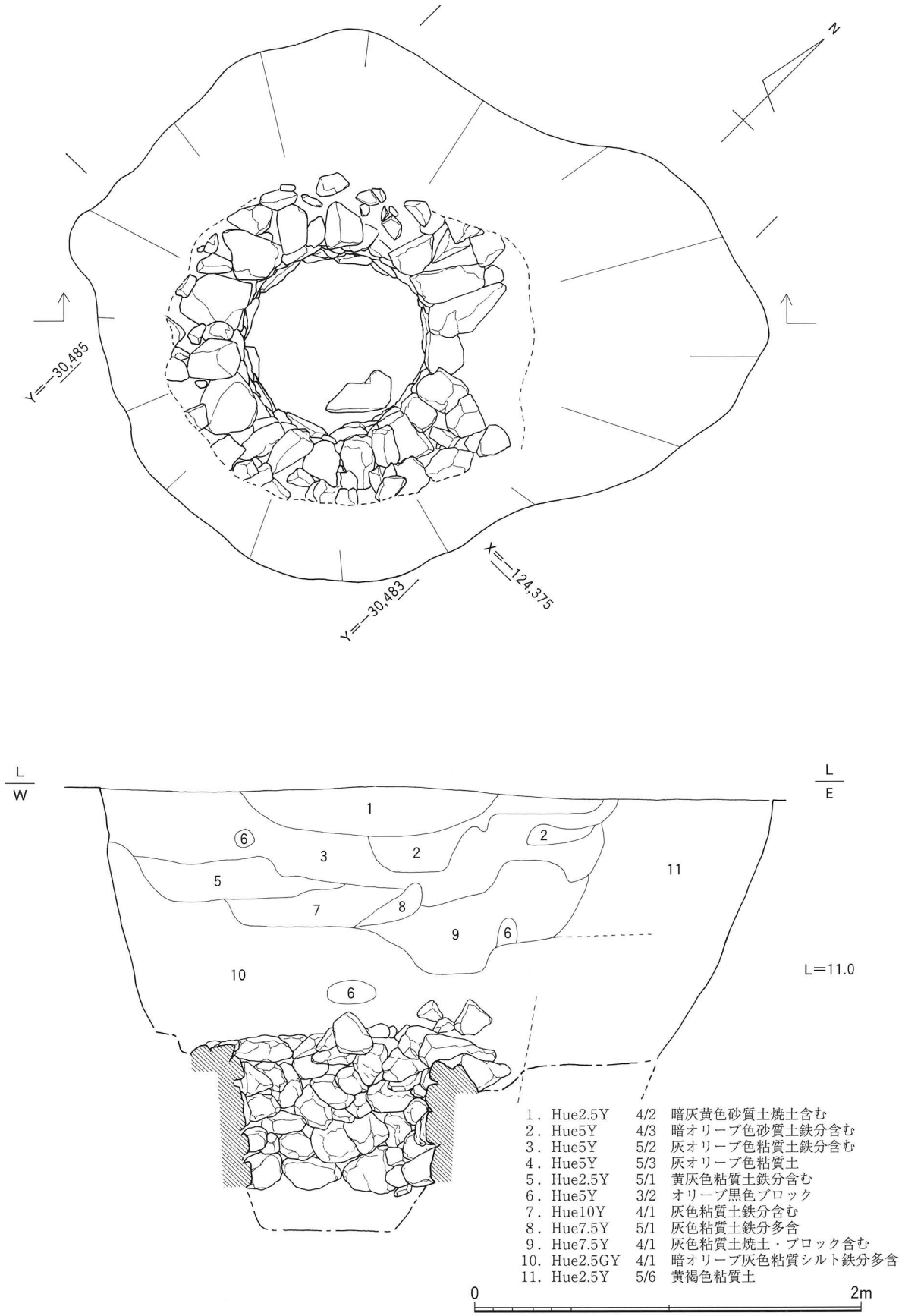
ＳＥ174（第７図・図版３）

調査区中央部で検出した、石組みの井戸枠を持つ井戸である。掘り方は楕円形であり、長辺約3.6m、短辺約2.6m、深さ約２ｍである。



第６図　ＳＥ118平面図・断面図（1/30）

前述のＳＥ118と比較すると、石組の残存状況はかなり良好であり、全周において三段あるいは四段、部分によってはそれ以上を残す。井戸枠埋土内からの出土遺物は、土師器皿・青磁椀・すり鉢の他、掘り方内の上端近くにおいて弥生時代の甕が出土した。これについては、井戸の掘削時に出土した弥生土器を廃棄したものが、井戸の使用時に撹拌されたか、あるいは井戸の使用時に掘り方の壁面が崩れ、弥生土器が露出したなどの可能性が考えられる。いずれにせよ、井戸の使用年代と直接的な関連性がないことは確かである。



第７図　ＳＥ174平面図・断面図（1/30）

ＳＥ211（第８図・図版３）

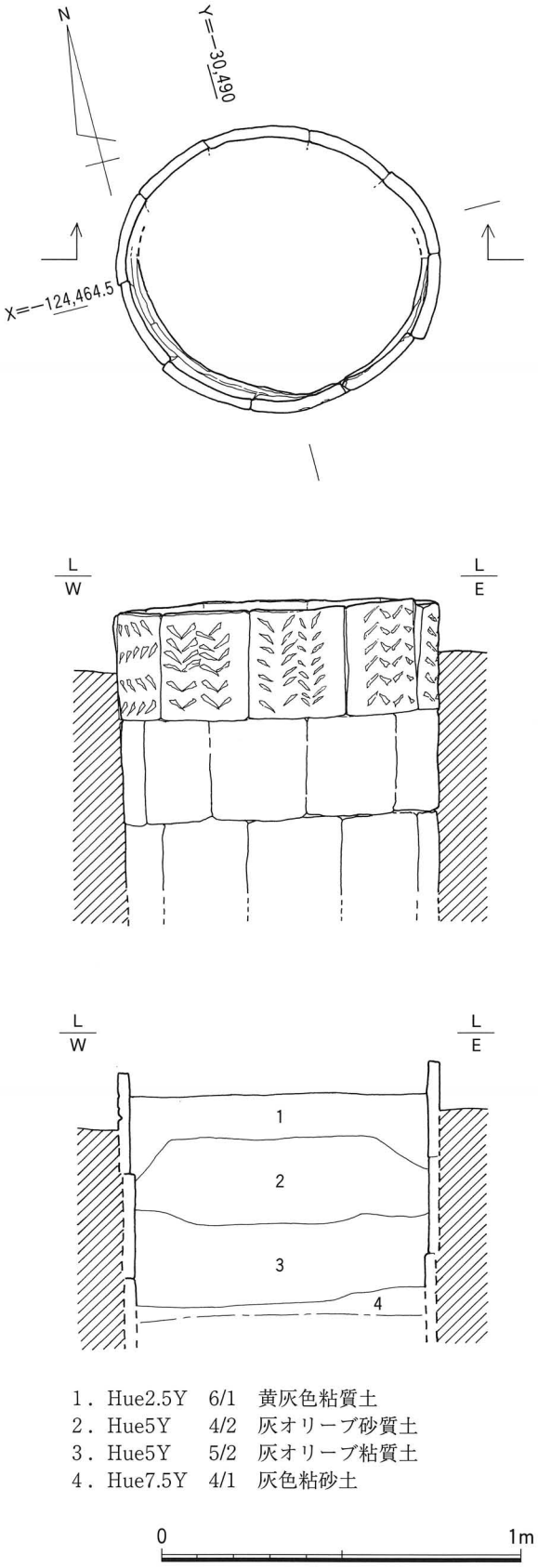
調査区北西端付近で検出した、瓦組の井戸枠を持つ井戸である。江戸時代末期（19世紀）頃に造られたと考えられる。直径約0.9mで一段につき縦約30cm、横約25cmの井戸瓦10枚を用いている。

井戸枠については、瓦と瓦の接する部分を、煉瓦積みのように一段ごとに半分ずつ横へずらして、安定性を保つ工夫を加えながら造られている。深さについては、瓦三枚分（深さ約0.8m）までは掘削して確認したが、安全面の問題等があり、完掘には至らなかった。

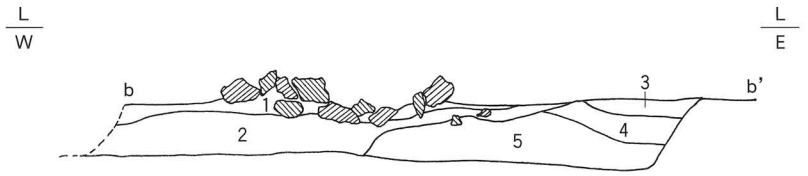
瓦組井戸の普及は基本的に井戸枠専用の井戸瓦の出現以降である。井戸瓦の製作は大阪府堺環濠都市遺跡で中世末期の16世紀に始まり、近世には大阪・京都を中心として普及するようになる。一段に使われる枚数は大体偶数であり、８枚使用、10枚使用のものがその大半を占めている。井戸瓦の外面の刻印は、くさび形が主流であるが、それ以外の刻印もしばしば見られる。ちなみに、ＳＥ211の井戸瓦の文様はくさび形であるが、一枚一枚くさび形の本数や向きが異なる。

ＳＸ300（第９図・図版１）

調査区東端で検出した集石遺構である。長さ約３ｍ、幅約１ｍの範囲に渡っており、そのほとんどが自然石であるが、中に江戸時代の石臼片が混入していた。その様相から見ておそらく茶臼であると思われる。



第８図　ＳＥ211平面図・断面図（1/20）



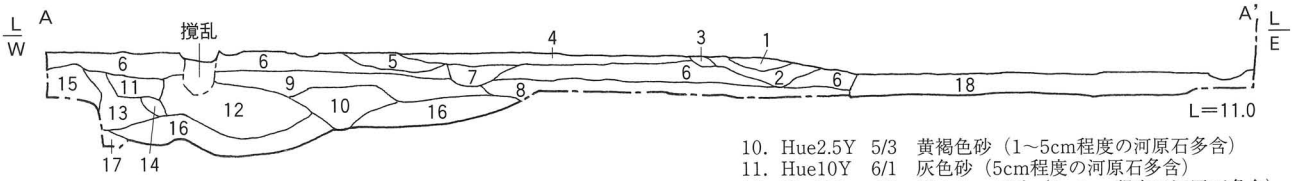
1．Hue7.5Y　6/1　灰色砂質土鉄分含む
2．Hue2.5Y　6/2　灰黄色シルト鉄分多含
3．Hue2.5Y　7/2　灰黄色砂質土鉄分含む
4．Hue5Y　7/2　灰白色シルト鉄分少含（直径5～10cm程度の河原石多含）
5．Hue10YR　5/1　褐灰色シルト鉄分多含

0　2m

第９図　ＳＸ300平面図・断面図（1/30）

道路状遺構（第10図）

調査区北半の北端から南端にかけて、細礫を含んだ土層を帯状に確認したため、道路遺構であることを想定しながら調査を進めた。道路側溝及び路面であると考えられる遺構を土層観察によって確認したが、遺物が全く出土しないこともあり、これについては調査区南半で詳細に調査した。



1．Hue2.5Y　7/2　灰黄色砂質土鉄分含む
2．Hue5Y　7/2　灰白色シルト鉄分少含（直径5～10cm程度の河原石多含）
3．Hue7.5Y　6/2　灰オリーブ色砂質土（直径2～3cm程度の河原石含む）
4．Hue7.5Y　6/1　灰色砂質土鉄分含む
5．Hue5Y　6/1　灰色土
6．Hue2.5Y　6/2　灰黄色シルト鉄分多含
7．Hue10YR　6/1　褐灰色土（5cm程度の河原石多含）
8．Hue10YR　5/1　褐灰色シルト鉄分多含
9．Hue10YR　5/2　灰黄褐色砂（1～5cmの河原石・普通の石多含）
10．Hue2.5Y　5/3　黄褐色砂（1～5cm程度の河原石多含）
11．Hue10Y　6/1　灰色砂（5cm程度の河原石多含）
12．Hue5Y　4/2　灰オリーブ砂（1～5cm程度の河原石多含）
13．Hue7.5Y　4/2　灰オリーブシルト鉄分含む
14．HueN　5/1　灰色粘土鉄分含む
15．Hue10Y　4/1　灰色粘質土鉄分含む
16．Hue5Y　4/3　暗オリーブ色砂（1～5cm河原石多含）
17．Hue7.5Y　4/1　灰色砂（1mm程度の砂粒）
18．Hue2.5Y　5/1　黄灰色粘質シルト鉄分含む

0　4m

第10図　道路遺構部断割断面図（1/80）

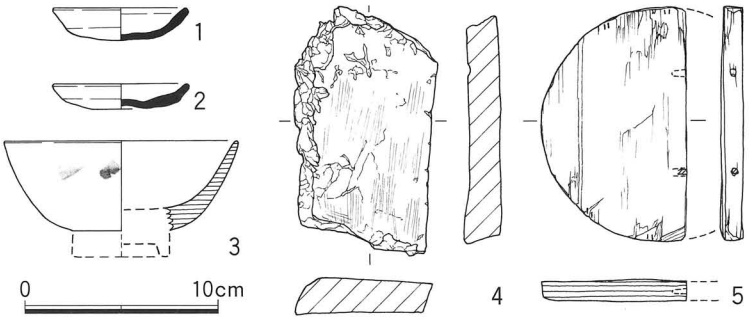
2．出土遺物

調査区北半における出土遺物は、遺構に伴うもの、包含層内のものにかかわらず、面積の割に少量であった。内容は主に土師器皿・すり鉢・陶磁器といった中世土器遺物であるが、中には曲げ物や農耕具などの木製品も見られる。以下にその詳細を述べる。

ＳＥ118（第11図・図版９）

ＳＥ118からの出土遺物は、土師器皿・漆器椀・石製品・曲げ物である。

土師器皿（１・２）はいずれも小片である。16世紀前半頃のものである。漆器椀（３）は部分的に金箔が付着している。底部は残存していない。石製品（４）は用途不明品である。意図的に平らにしたと思われる面を持ち、その所々に加工痕が残る。しかし、表面は磨かれてはおらず、質感は未加工の自然石と同様である。曲げ物（５）は井戸の底部付近から出土した。直径12cmほどであり、全体の１／２ほどが残存している。

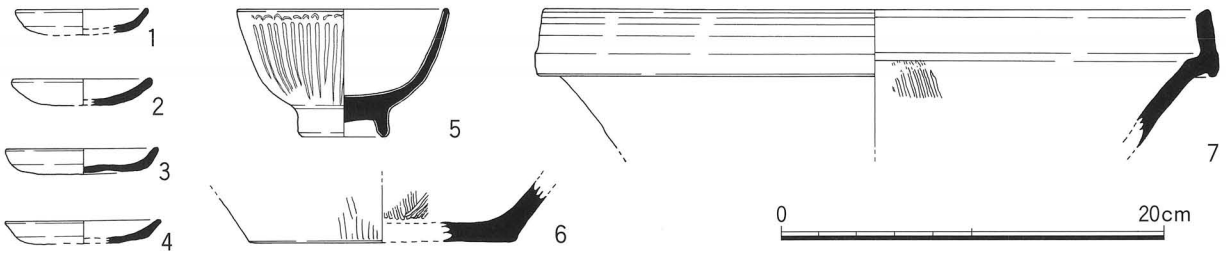


第11図　ＳＥ118出土遺物実測図（1/4）

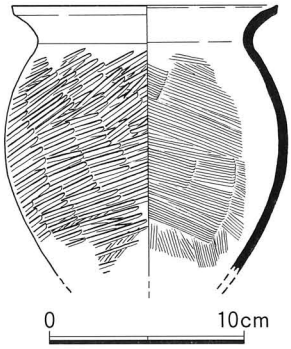
ＳＥ174（第12，13図・図版９）

ＳＥ174からの出土遺物は、土師器皿・青磁椀・すり鉢・弥生土器である。

土師器皿（第12図１～４）はＳＥ118出土の土師器皿と同様に、いずれも小片である。時期についても、ＳＥ118のものとほぼ同時期であり、16世紀前半頃のものと考えられる。青磁椀（第12図５）は完形品ではないが、口縁部から底部に至るまで残存していて、状態は良好である。胎土は赤褐色を呈する。なお、高台部の畳付の内側まで施釉されており、良品であると言える。すり鉢（第12図６・７）は底部のみ残存している個体と、口縁部から体部の上半にかけて残存している個体があるが、いずれも残存状態が良好でないため、内面の掻き目の本数及び掻き目の間隔が確認できない。



第12図　ＳＥ174出土遺物実測図（1/4）

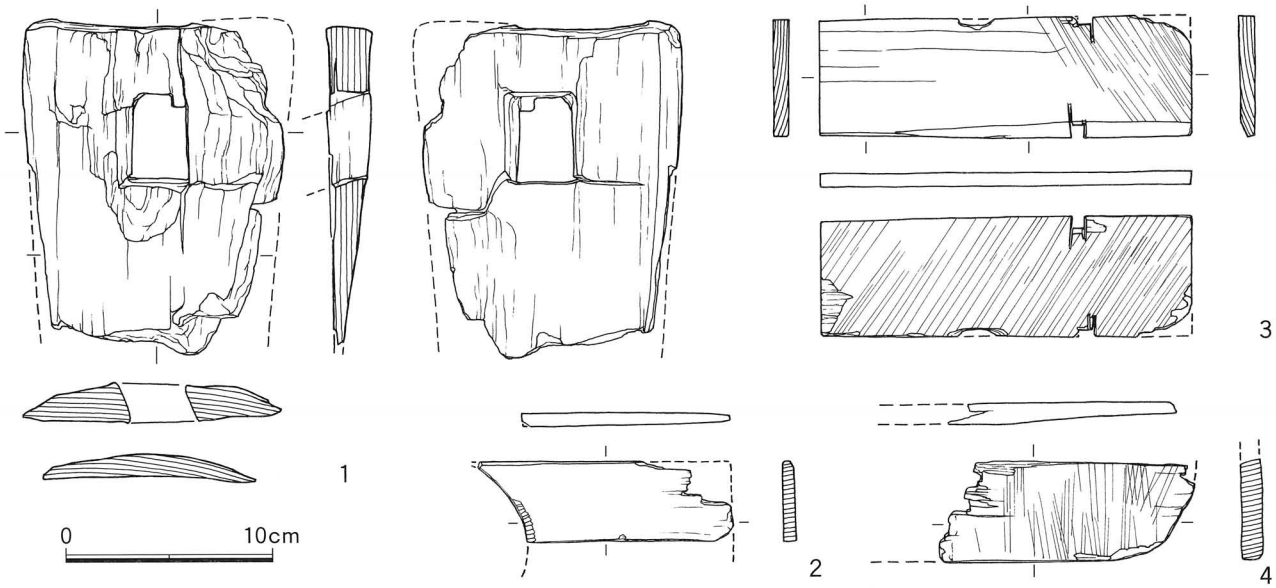


第13図　ＳＥ174出土弥生土器実測図（1/4）

ＳＥ174から出土した弥生土器（第13図）は、外面調整の叩き目の様子などから弥生時代後期のものと思われる。残存状態は良好である。

ＳＸ217（第14図・図版９）

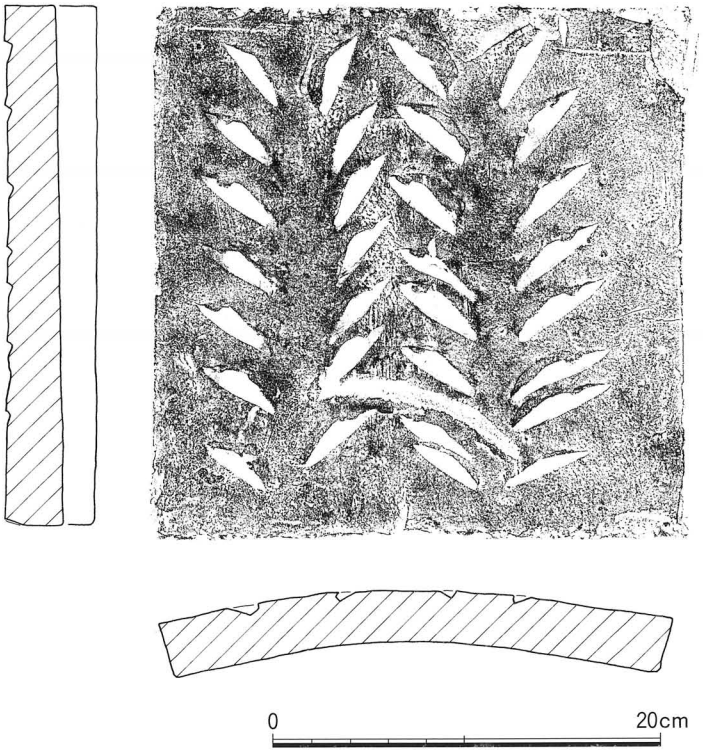
ＳＸ217からの出土遺物は、木製品（１～４）である。１は農耕具の一部であることがわかるが、２～４はいずれも用途不明の木製品である。



第14図　ＳＸ217出土木製品実測図（1/4）

ＳＥ211（第15図・図版９）

ＳＥ211の出土遺物は井戸瓦である。江戸時代末(19世紀)頃のものである。井戸瓦は前述の通り縦約30㎝、横約25㎝、厚みは約３㎝程度である。今回は井戸枠内の埋土について、瓦三段分のみを掘り下げる形で調査を行い、井戸枠外である井戸の掘り方埋土については、安全面や作業上の問題から、瓦一段分を掘り下げるに止めた。よって、井戸瓦の取り上げも一段分のみとした。文様についても前述の通りくさび形であり、くさび形の本数及び方向については、一段（10枚）すべてにおいて異なる。

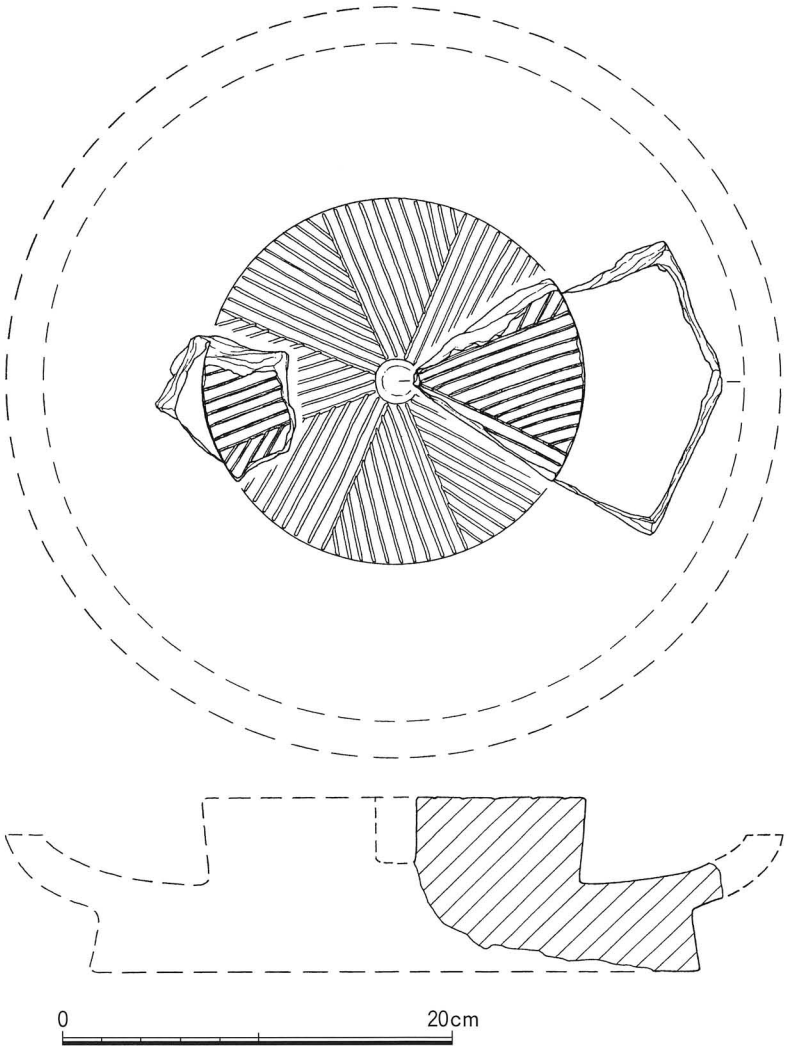


第15図　ＳＥ211井戸瓦拓影（1/4）

ＳＸ300（第16図・図版９）

ＳＸ300の出土遺物は、石臼のみである。石臼は、擦り合わせ面が全周の１／６ほど残存している。擦り合わせ面の線刻は面を均等に８分割する形で、面の中央から外側へ向けて放射状に入っており、中央に穿たれている孔の一部が残存している。

擦り合わせ面の線刻による分割は、６分割・８分割といった偶数の分割のものが主流であるが、５分割や７分割のものもごく少数ながら見受けられるようである。



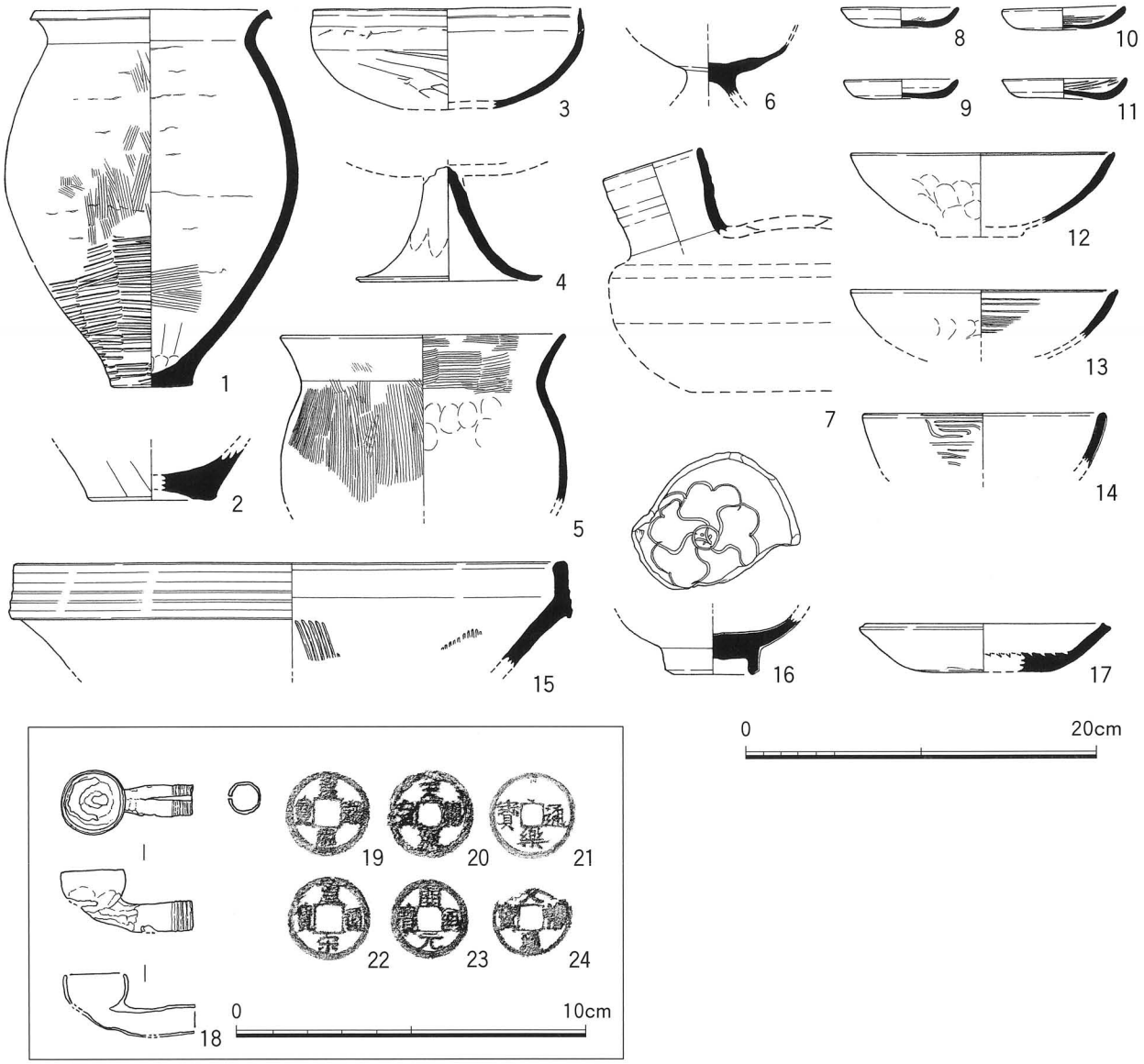
第16図　ＳＸ300出土石臼実測図（1/4）

包含層出土遺物（第17図・図版９）

包含層内において出土した遺物は、弥生土器・土師質高杯・布留式甕・高杯・須恵質平瓶・土師器皿・瓦器椀・すり鉢・白磁椀・卸し目皿・煙管・銭貨である。

弥生土器（１・２）は、叩き目及び底部の形態などから、弥生時代後期のものと考えられる。土師質高杯（３・４）は古墳時代のものであり、ともに淡赤褐色を呈する。色調・胎土が類似し同一個体である可能性も含まれるが、接合関係はない。布留式甕（５）は調査区北端の側溝内より出土した。高杯（６）は古墳時代のものである。前述の３・４の高杯に比べて若干新しい。須恵質平瓶（７）は口縁部から頸部にかけて残存している。焼成は良好であり、灰色を呈する。８世紀頃のものである。土師器皿（８～11）は、ＳＥ118・ＳＥ174で出土したものと同様のものであり、16世紀前半頃のものと考えられる。瓦器椀（12・13）は樟葉型のものであり、14世紀半ば頃のものである。すり鉢（14）は口縁部から体部にかかるぐらいまでが残存しており、15世紀後半頃のものである。青磁椀（14・16）はいずれも14世紀後半から15世紀前半頃のものと考えられ

る。16については底部内面に花文の線刻が施されている。卸し目皿（17）は15世紀後半のものと考えられる。煙管の雁首（18）は詳しい時期はわからないが、江戸時代のものであろう。銭貨（19～24）はそれぞれ異なる年代のものである。19・22は皇宋通寶である。北宋銭であり、寶元２年（1039）に初鋳された。20･24はおそらく天禧通寶であると思われる。これも北宋銭であり、天禧元年（1017）に初鋳された。21は永樂通寶である。明銭であり、永楽６年（1408）に初鋳された。主に朝貢貿易の下賜用とされるものであり、日本においても江戸時代初頭に正貨の役割を担っていた。23は開元通寶である。初鋳は唐代に遡り、和同開珎のモデル銭貨とされている。以上のように、銭貨は年代に幅が見られるが、北宋銭については実際に鋳造していた年代のものが出土した可能性は低い。現地で使用されなくなったものが日本に流通したか、あるいは日本で造られた粗鋳銭の類であると考えられる。

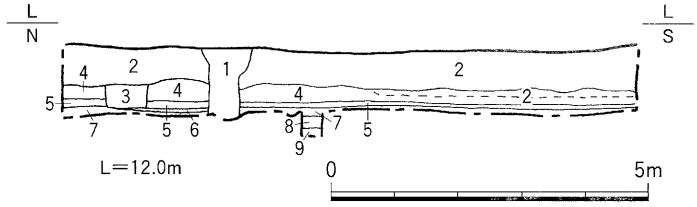


第17図　包含層出土遺物実測図（1/2・1/4）

第18図　調査区南半　全体図（1/120）

（2）調査区南半における調査の概要

調査区南半における調査は、平成17年６月１日から同年８月５日まで行なった。６月１日から６月27日までの約一ヶ月間については、調査の作業効率を上げるため、中央部東西方向に約４ｍ幅の車両用進入路を残した状態で、北半・南半を同時進行した。



1．撹乱（埋管造成）
2．盛土（鉄分混入土）
3．撹乱
4．Hue5Y　6/1　灰色砂質土鉄分含む
5．Hue2.5Y　6/2　灰黄色砂質土
6．Hue7.5Y　4/1　灰色粘砂土鉄分多含
7．Hue10YR　6/8　明黄褐色粘質土鉄分多含
8．Hue5Y　5/1　灰色粘土鉄分含む
9．Hue5Y　6/2　灰オリーブ色粘質土鉄マンガン多含

第19図　調査区南半　東壁土層断面図（1/120）

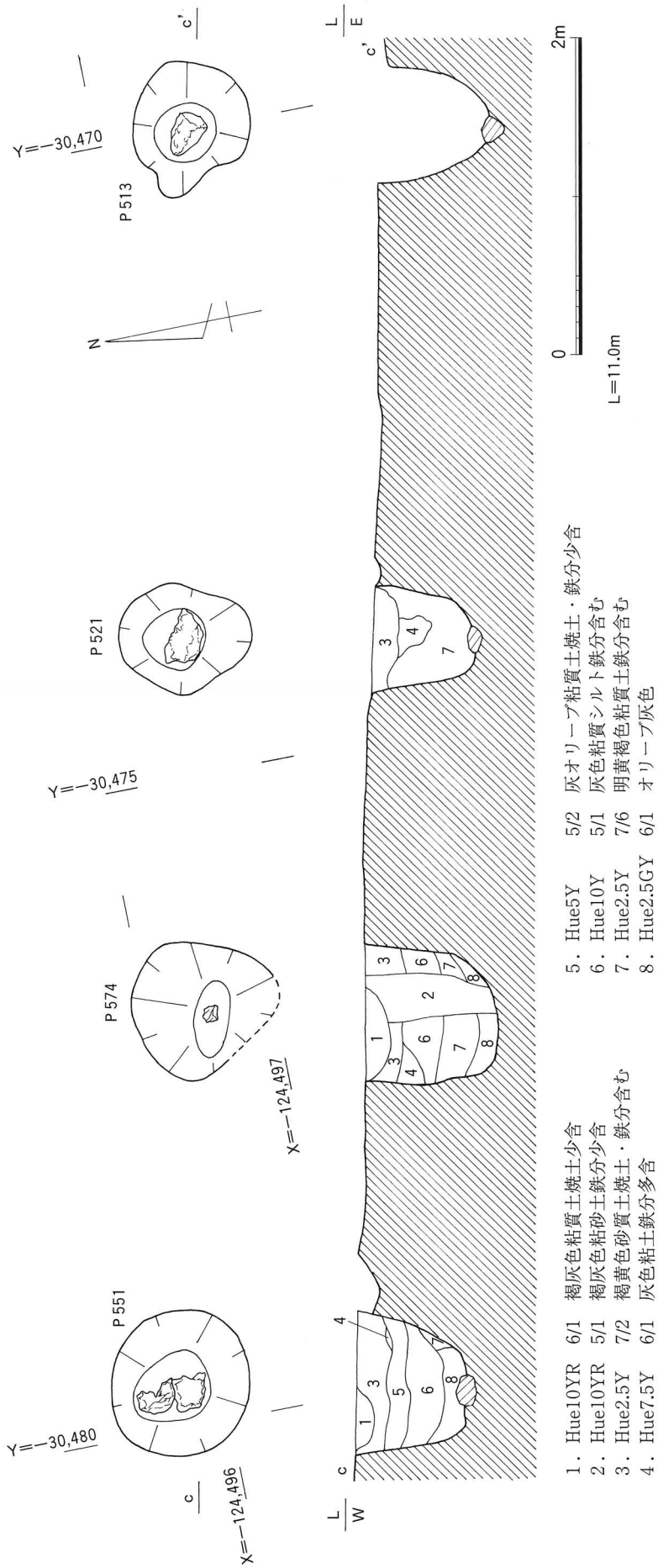
1．検出遺構

主な検出遺構としては、北半と同様に石組の井戸が１基、近世遺物が大量投棄された大きな落ち込み状遺構、土師器皿・すり鉢・羽釜などが多く出土した東西方向の溝、土師器皿の大量埋納遺構、東西方向の大型柱列などが挙げられる。それぞれの詳細について以下に述べていく。

大型柱列（第20図・図版６，７）

調査区南半中央付近において、南北・東西ともに約１ｍの掘り方を持つ東西方向の柱穴を検出した。西から順にＰ551・Ｐ574・Ｐ521・Ｐ513であり、柱穴の間隔は西から３ｍ・３ｍ・４ｍとなっている。Ｐ574以外については柱穴の底部に礎盤石が座っていた。東西方向のみの検出であり、直行方向である南北の延長と東西の延長の有無を確認するために断割を行なったが、断面上でも確認できなかった。柱穴の掘り方の直径が約１ｍという一列のみの大型柱列であり、加えて柱間距離も一定でないことから建物ではないようである。

出土遺物はＰ574以外はいずれも少量であったが、Ｐ574に関しては瓦器椀・土師器皿・陶器などが出土した。他の柱穴と比較して



第20図　大型柱列平面図・断面図（1/40）

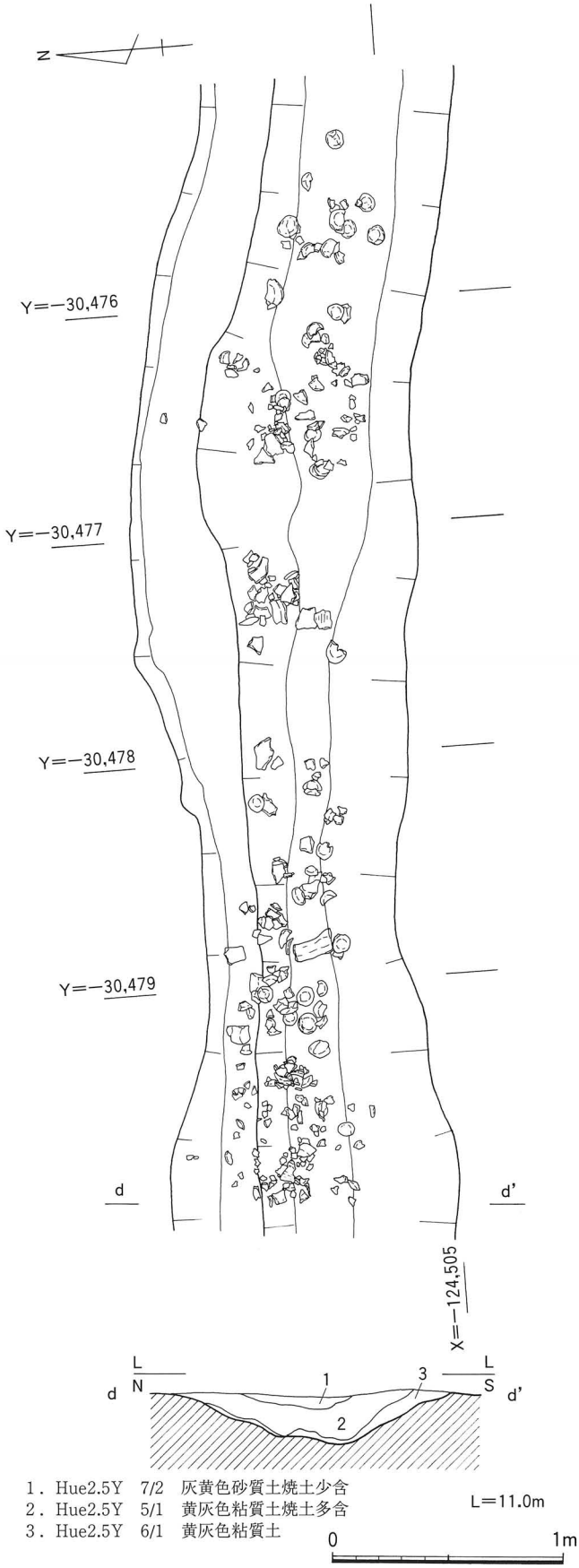
出土遺物が多く、礎盤も持たないので大きく様相が異なるが、断面上には柱痕跡を確認したので、柱穴であることは確かである。礎盤については、抜き取られた可能性が高いと考えている。

ＳＤ544（第21図・図版５）

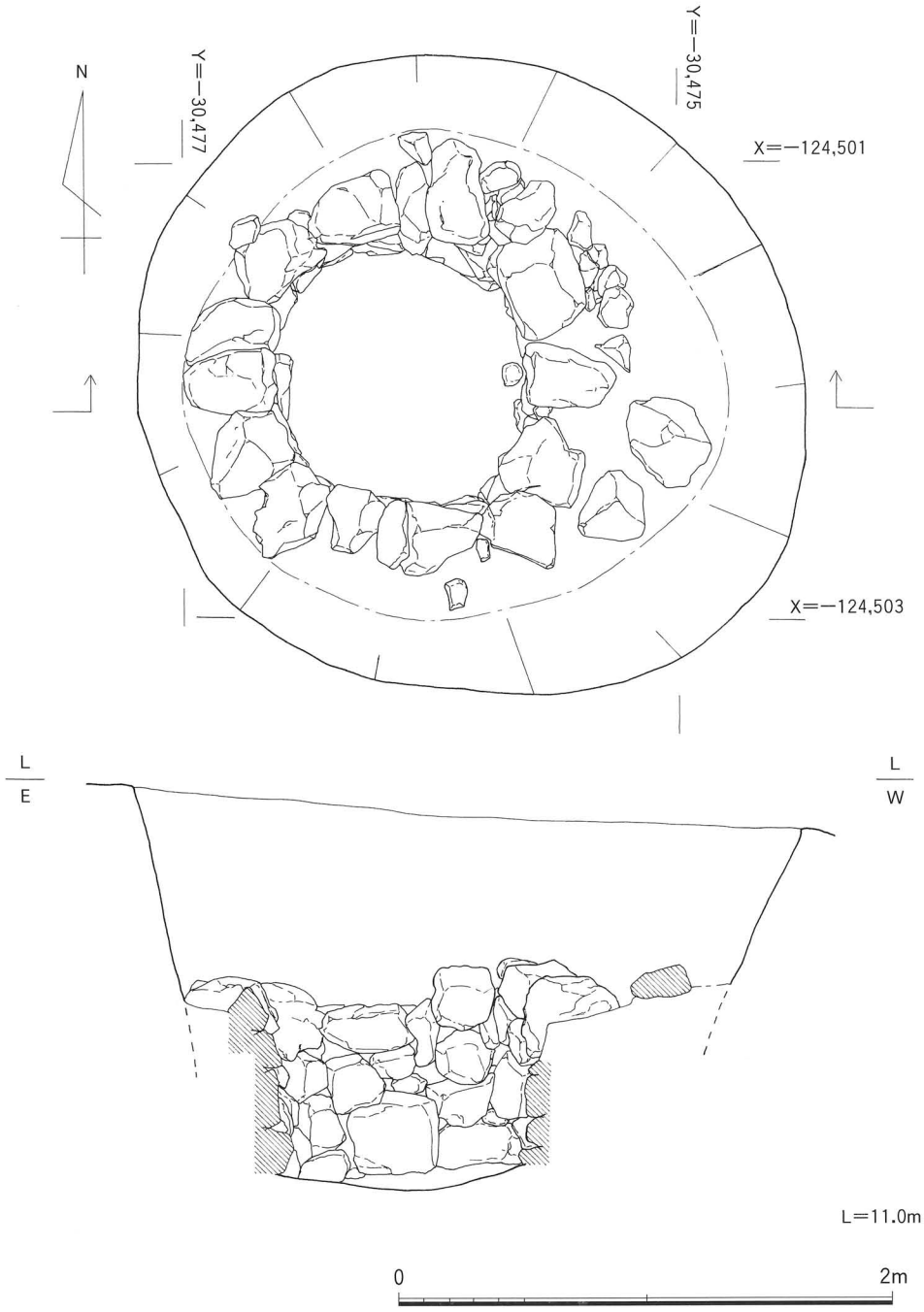
調査区南端で検出した、東西方向の幅約0.8m、深さ約15cmの溝である。東端はＳＸ530に切られ、西端は調査区外へ続いているため、全長は確認できなかった。ＳＸ530から西に３ｍあたりで集中的に遺物が出土した。出土遺物は土師器皿・すり鉢・瓦質土器・陶器などの中世遺物である。大型柱列と同一方向に延びており、Ｐ574出土遺物との時期もほぼ同一であることを踏まえると何らかの施設及びそれに伴う溝という可能性もあるが、大型柱列との間隔がかなり広いので関連性は薄い。

ＳＥ543（第22図・図版４）

調査区南端で検出した、石組の井戸枠を持つ井戸である。掘り方の直径は約2.7m、深さは約1.6mである。北半で検出した石組井戸のＳＥ118、ＳＥ174よりも石組の残存状態が良好である。石材はすべて自然石を使用している。井戸底より約0.5m上部から湧水層となっている。出土遺物は土師器皿・すり鉢であり、15世紀後半頃のものと思われる。



第21図　ＳＤ544平面図・断面図（1/30）



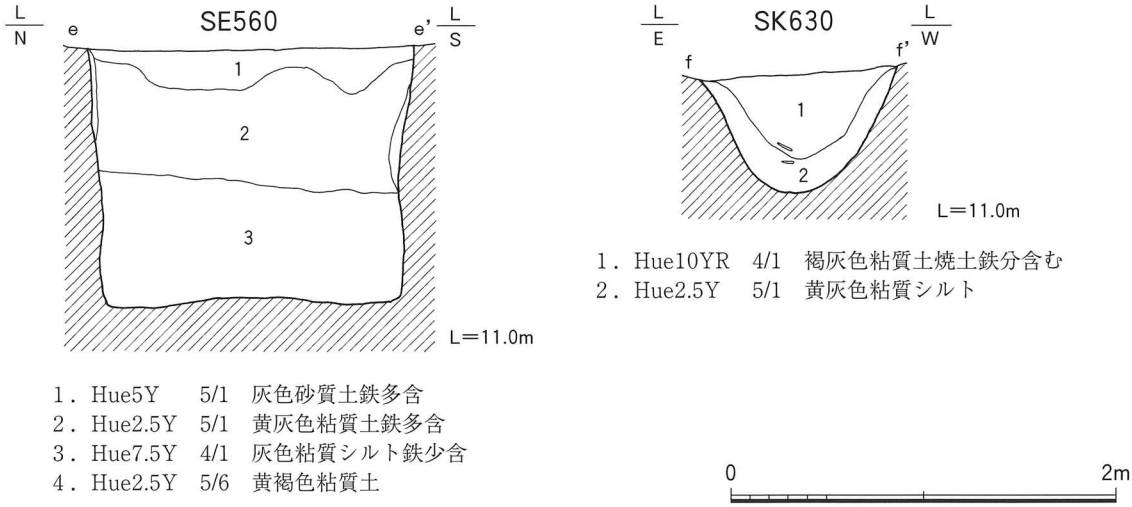
第22図　ＳＥ543平面図・断面図（1/30）

ＳＥ560（第23図）

調査区南西端で検出した素掘り井戸である。円形の掘り方であり、掘り方の直径は約1.6m、深さは約1.3mである。底部直上で湧水層となっている。調査区北半で検出した石組の井戸枠を有する井戸と比較して、検出面から底部までの深さが浅くなっていることから、恒常的に利用する井戸とは違い、短期間における水の利用目的があって掘削した井戸である可能性も考えられる。なお、埋土内からの出土遺物はなかった。

ＳＫ630（第23図）

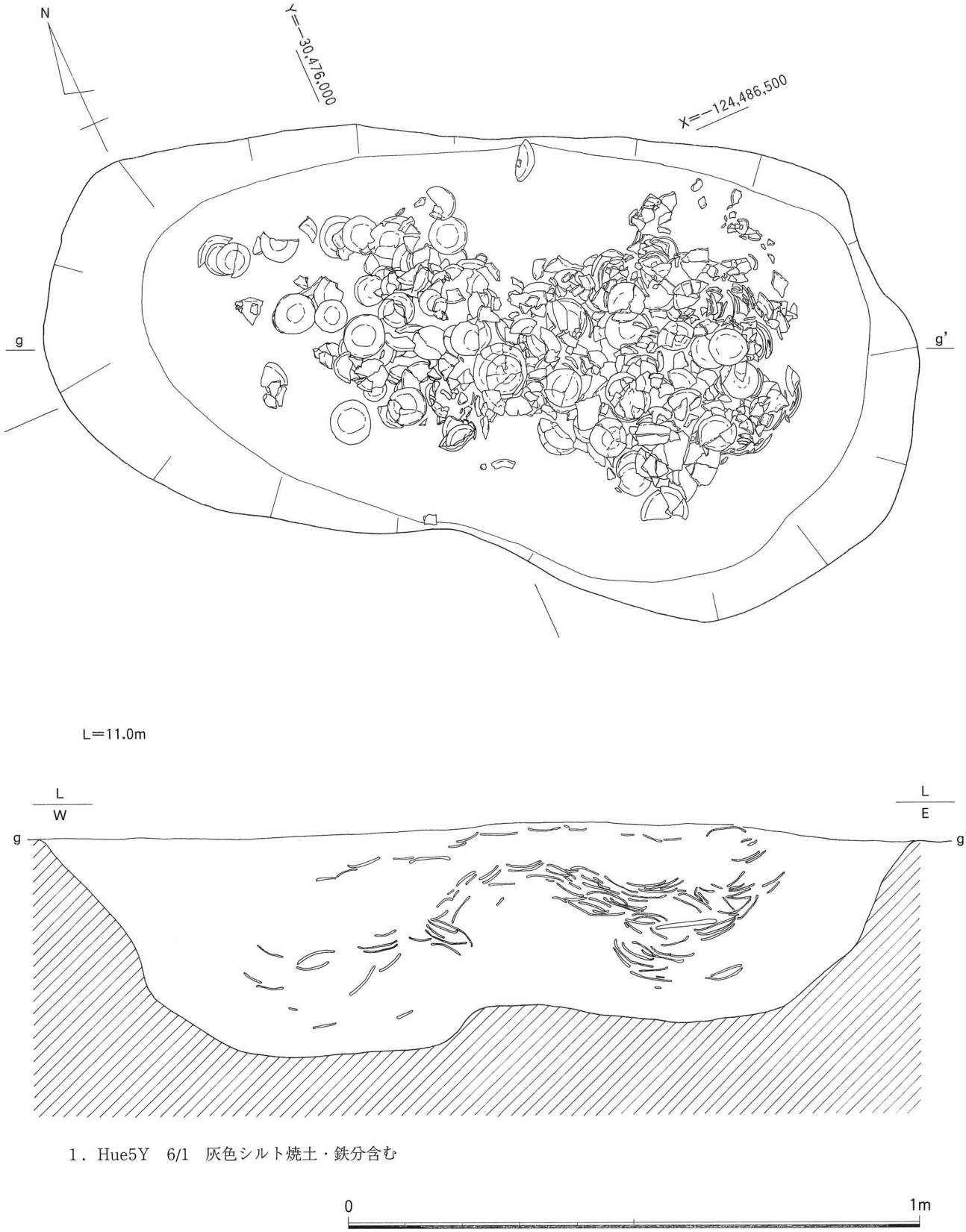
調査区北端において検出した、南北・東西ともに約１ｍの掘り方を持つ土坑である。検出面から底部に至るまでの遺構埋土内全体において、土師器皿・瓦器皿・瓦器椀・壺・鉢・羽釜が大量に出土した。他の遺構と比較すると、瓦器椀の出土量は顕著である。羽釜についてはそのほとんどが煤の付着したものであり、生活における実用品であったことがわかる。遺構については、廃棄用土坑である可能性が高いと思われる。



第23図　ＳＥ560・ＳＫ630断面図（1/40）

ＳＫ575（第24図・図版８）

調査区北端で検出した、南北約0.8m、東西約1.5m、深さ約0.4mの楕円形の掘り方を持つ土坑である。検出面から底部に至るまでの遺構埋土内全体において、土師器皿が何層にもわたって集積された状態で出土した。完形品も多く、出土状況は極めて良好であった。土師器皿の集積の中ほどから、直径12cmほどの円形の鉄製品が出土した。土師器皿は、部分的に火を受けるなど、灯明皿として用いられていた痕跡があるものが多かったので、検出時は廃棄用土坑であると考えたが、鉄製品の出土により、廃棄ではなく地鎮などのような何らかの祭祀を行った場として機能していた可能性が高いと考えられる。

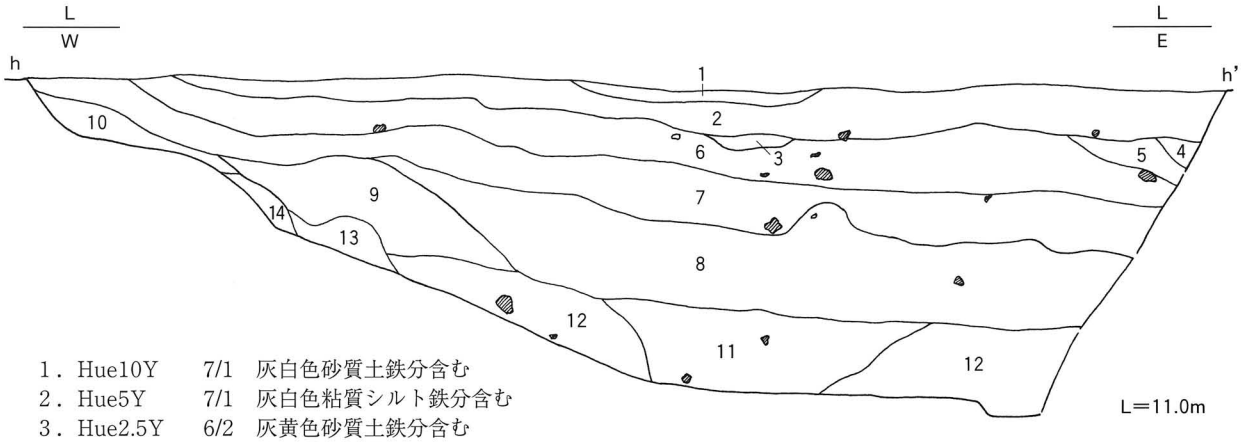


第24図　ＳＫ575平面図・断面図（1/10）

ＳＸ530（第25図）

調査区東端で検出した、南北約５ｍ、深さ約1.6ｍの落ち込み状遺構である。東半分については調査区外となっているため、東西の延長については不明である。

検出面より約1.4ｍ下からは湧水層となっていたことから、井戸のように水を恒常的に得られるような構築物があったことがわかる。江戸時代に、伏見から山崎・芥川・郡山・瀬川・昆陽・西宮を経て兵庫に至る、山崎通という本街道とは異なる街道が存在した。本街道の伏見・大坂間の交通量の多さを回避するため、西国・中国・四国などの大名や一般の武士、庶民の通行が多い重要な街道であったようである。そして、その様子を描いた『山崎通分間延絵図』に、現在は史跡桜井駅跡内に覆屋を建てて保存されている旗立松とともに、旗立松に隣接する形で池が描かれていることから、その池に該当する遺構である可能性が高いと思われる。ＳＸ530における出土遺物は土師器皿・陶磁器・墨書入りの曲げ物・木製椀・櫛・土人形・陶製の置物などがある。



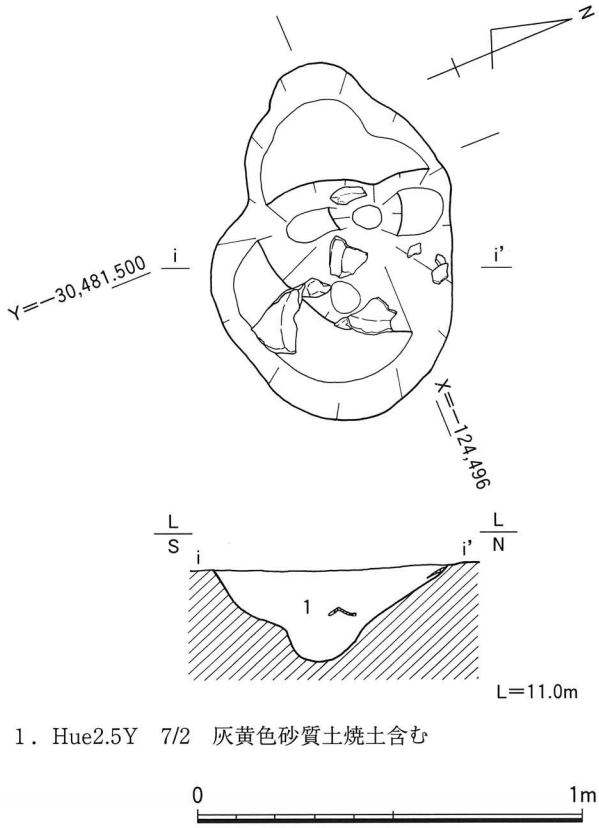
1．Hue10Y　7/1　灰白色砂質土鉄分含む
2．Hue5Y　7/1　灰白色粘質シルト鉄分含む
3．Hue2.5Y　6/2　灰黄色砂質土鉄分含む
4．Hue2.5Y　5/2　暗灰黄色粘質土
5．Hue2.5Y　6/3　にぶい黄色シルト（1cm程度の礫少含）
6．Hue10YR　5/1　褐灰色粘質シルト焼土・鉄分含む
7．Hue2.5Y　4/1　黄灰色粘質シルト鉄分多含
8．Hue7.5Y　5/1　灰色粘土鉄分含む
9．Hue2.5GY　5/1　オリーブ灰色粘砂土鉄分含む
10．Hue2.5Y　5/3　黄褐色砂（1～3cmの礫）
11．Hue7.5GY　5/1　褐灰色粘土
12．Hue5GY　4/1　暗オリーブ灰色砂（1cm程度の礫多含）
13．Hue7.5YR　3/4　暗褐色砂鉄分多含
14．Hue10GY　5/1　緑灰色粘土鉄分含む

0　2m

第25図　ＳＸ530断面図（1/40）

ＳＫ553（第26図・図版５）

調査区中央付近で検出した、東西約0.6ｍ、南北約１ｍ、深さ約0.3ｍの土坑である。出土遺物は三脚付きの瓦質鉢・土師器皿・石臼片である。石臼は調査区北半で検出したＳＸ300において出土した石臼と同様のものであるが、同一個体ではない。

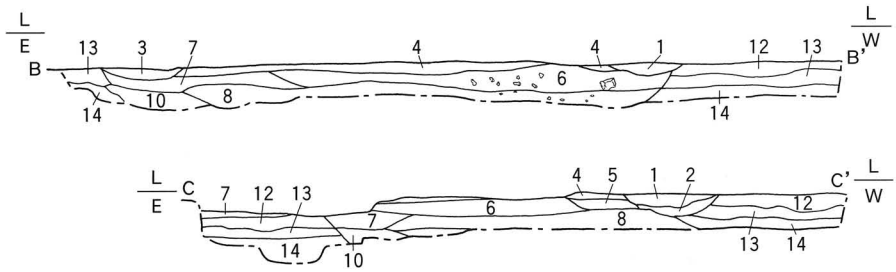


第26図　ＳＫ553平面図・断面図（1/20）

道路状遺構（第27図）

調査区北半東端において調査し、確認するに至らなかった道路状遺構については、南半においてもＳＸ530の北側で細礫層を検出した。北半と同様に断割を入れたところ、２ヶ所設けた断割の双方ともにおいて道路側溝を確認することができた。

北側の断割では、西・東両方の道路側溝を確認した。側溝間の心々距離は約６ｍである。路面も若干削られていたが、確認できる状況であった。路面及び側溝の埋土内における出土遺物はなかった。南側の断割では、東の道路側溝のみを確認した。路面については、北側の断割と同様である。今回検出した道路については、座標の南北にほぼのる形で通っており、側溝の心々距離も約６ｍと広いことから、西国街道である可能性が高い。



1．Hue2.5Y　6/2　灰黄色粘質シルトよくしまった土（道路東側溝）
2．Hue10YR　6/1　褐灰色粘質シルト鉄分含む
3．Hue2.5Y　6/2　灰黄色粘質シルトよくしまった土（道路西側溝）
4．Hue2.5Y　5/2　暗灰黄色粘砂土（１cm程度の礫多含）
5．Hue7.5Y　4/1　灰色砂質土（1～5cm程度の河原石多含）
6．Hue2.5Y　5/3　黄褐色砂質土（1～5cm程度の河原石多含）
7．Hue10YR　6/1　褐灰色粘質シルト鉄分含む
8．Hue5Y　5/2　灰オリーブ色砂質土（1～5cm程度の河原石多含）
9．Hue5Y　5/2　灰オリーブ色砂質土
10．Hue10Y　5/1　灰色粘砂
11．Hue2.5Y　6/8　明黄褐色粘質砂
12．Hue2.5Y　4/1　黄灰色粘土
13．Hue5Y　5/1　灰色粘土鉄分含む
14．Hue5Y　6/2　灰オリーブ色粘質土

0　4m

第27図　道路遺構部断割断面図（1/80）

2．出土遺物

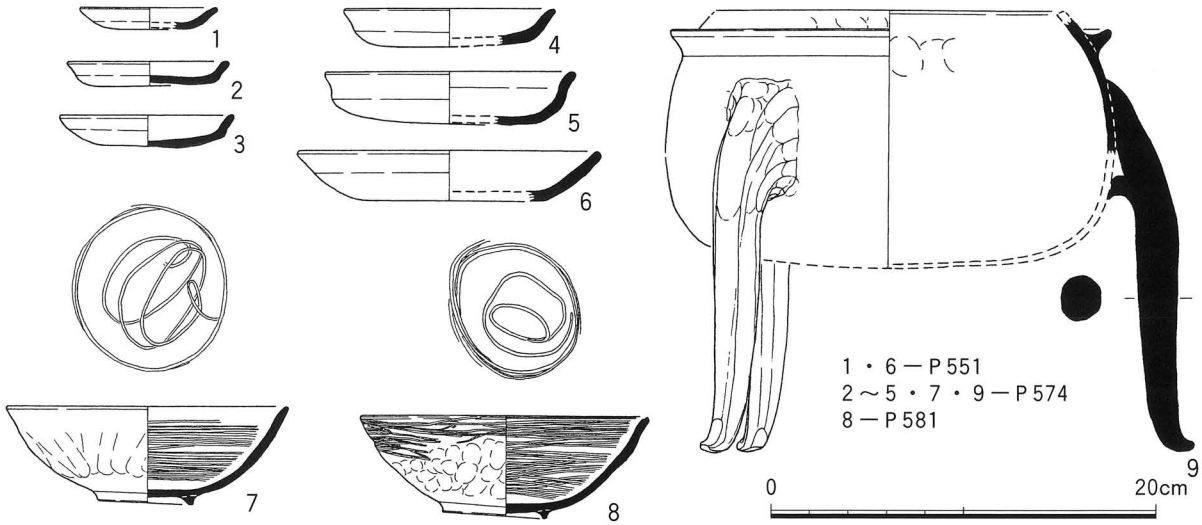
調査区南半においては、前述の調査区北半に比べてかなり多くの遺物が出土した。内容は、北半と同様に中世期の遺物が大半を占めているが、北半の遺構で出土したものよりも相対的に若干古相を示す。しかし、北半の包含層出土遺物に含まれたような弥生土器や布留式甕などの古代以前の遺物は見られなかった。南半における出土遺物の構成の特徴としては、調査区北半と異なり、瓦器椀の出土が顕著に見られるということである。中世期遺物以外では、ＳＸ530から出土した近世期の曲げ物・陶磁器等があり、南半における遺物の時期としては概ね13世紀から19世紀に相当するものが含まれている。それぞれの詳細については以下に述べる。

大型柱列（第28図・図版11）

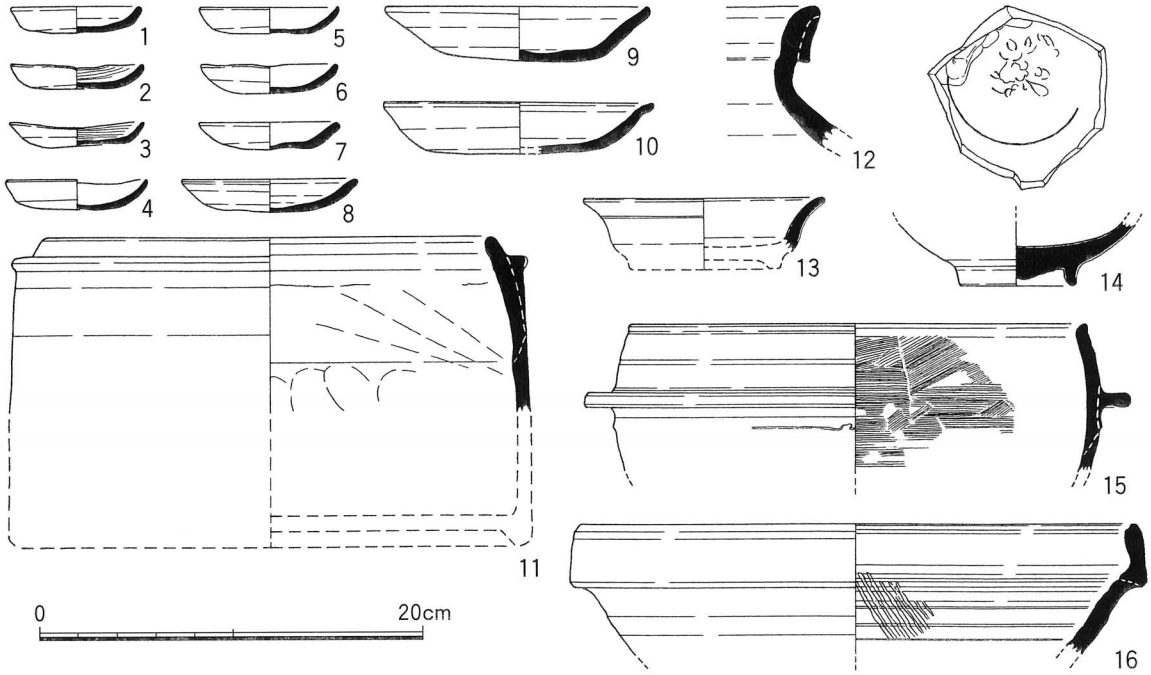
大型柱列における出土遺物は、土師器皿・瓦器椀・脚付き羽釜などである。土師器皿（１～６）は、調査区北半の遺構で出土した土師器皿とほぼ同じで、15世紀後半頃のものである。瓦器椀（７・８）は13世紀末から14世紀前半頃のものである。７は外面調整のユビナデ痕の残りが顕著であり口縁部の内側に沈線が見られないので大和型に該当すると考えられる。８は北半でも出土が見られた様相のものであり、この地域の主流である樟葉型に該当する。脚付き羽釜（９）は瓦質であり、瓦器椀とほぼ同時期のものである。

ＳＤ544（第29図・図版10）

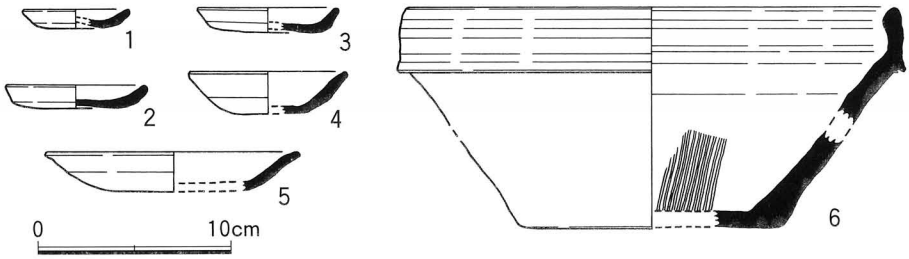
ＳＤ544の出土遺物は、土師器皿・火鉢・壺・青磁・羽釜・すり鉢などである。土師器皿（１～10）は、前述の大型柱列と同様、15世紀後半に相当する時期のものである。火鉢（11）・壺（12）ともに14世紀のものである。青磁（13･14）は15世紀頃のものと思われる。14については、底部内面に線刻が施されている。羽釜（15）・すり鉢（16）も14世紀後半から15世紀前半のものである。



第28図　大型柱列出土遺物実測図（1/4）



第29図　ＳＤ544出土遺物実測図（1/4）



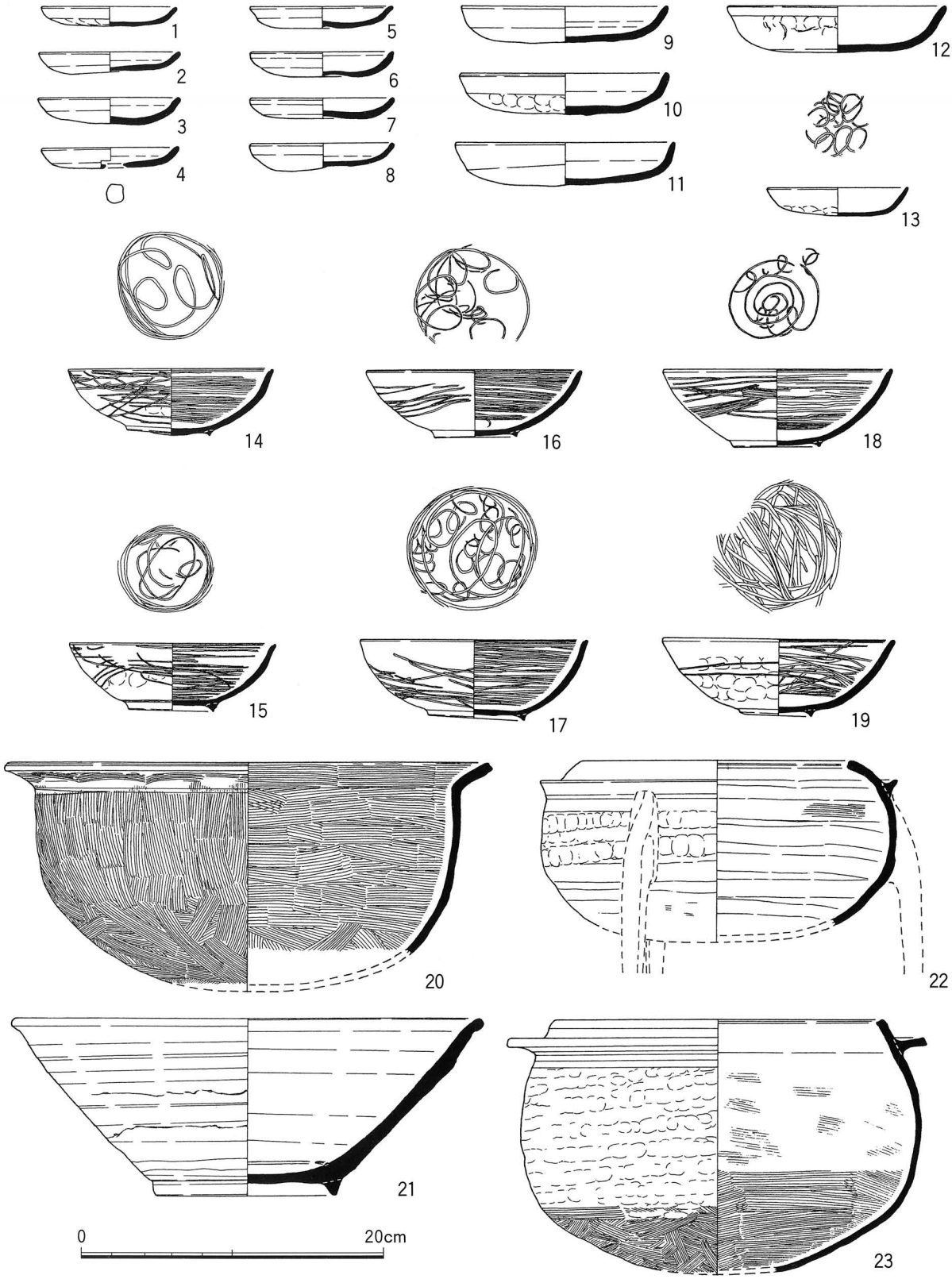
第30図　ＳＥ543出土遺物実測図（1/4）

ＳＥ543（第30図・図版14）

ＳＥ543の出土遺物は、土師器皿・すり鉢である。土師器皿（１～５）は、前述の大型柱列などと同様に15世紀末頃に相当する。すり鉢（６）についても土師器皿と同様、15世紀末から16世紀前半に相当するものである。

ＳＫ630（第31図・図版12，13）

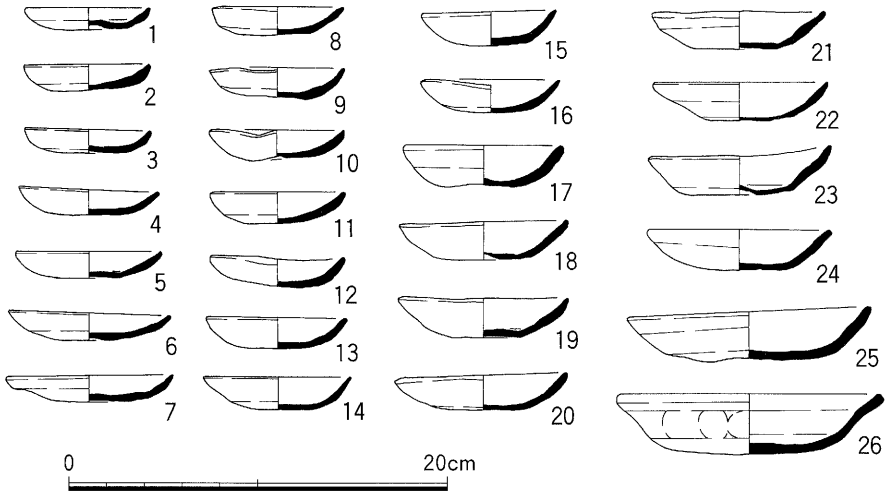
ＳＫ630の出土遺物は土師器皿・瓦器皿・瓦器椀・甕・鉢・羽釜である。土師器皿（１～12）は前述の遺構と同時期のものも含まれるが、やや古いものが多く、13世紀半ばから後半頃のものと考えられる。４については底部の中心に１㎝強の穿孔が見られる。これについては、穿孔のある部分に蝋燭を立て、明かり取りとして用いた可能性が考えられる。瓦器皿（13）は古相の土師器皿と同時期のものと考えられる。瓦器椀（14～19）はやや古相のものであり、13世紀前半頃のものと思われる。瓦器椀については出土量が多く、今回図示した以外にも残存状態の良好なものが多く見られるが、そのほとんどが樟葉型に該当する。中には大型柱列出土遺物でも見られた大和型も含まれるが、相対量としてはかなり少ない。土師器甕（20）・鉢（21）・脚付き羽釜（22）・羽釜（23）は土師器皿・瓦器椀よりも若干新しい印象を受ける。13世紀末から14世紀初頭頃のものであろう。



第31図　ＳＫ630出土遺物実測図（1/4）

ＳＫ575（第32図・図版15）

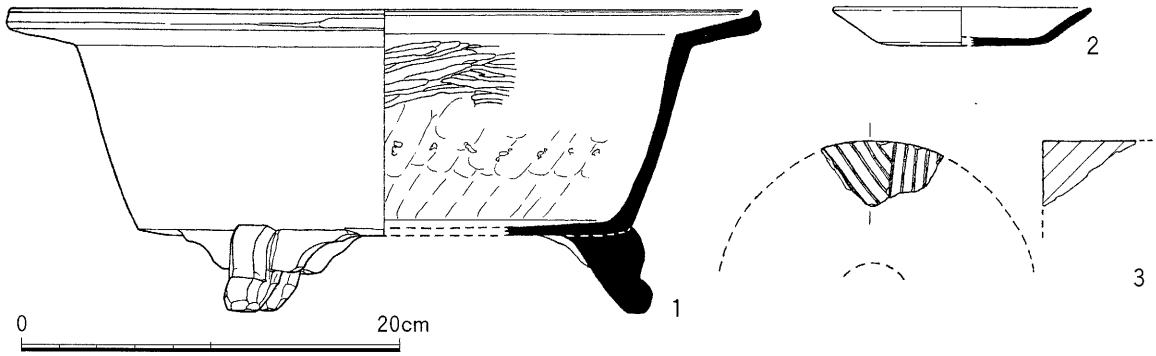
ＳＫ575の出土遺物は、土師器皿･鉄製品である。土師器皿については、個体数が約300点あり、その一部を図化した。土師器皿（１～26）は、ＳＤ544出土のものと同様に、15世紀後半頃に相当する時期のものである。法量・焼成・胎土などの属性については各個体でばらつきがあるが、直径７㎝前後のものがＳＫ575における出土構成の主体となっており、全体の過半数を占めている。それに準ずる形で直径９㎝前後のものがある。これについては全体の20％ほどを占めている。加えて、絶対数としてはごく少量ではあるが、直径13㎝前後のものも見られる。土師器皿の集積の中ほどより出土した鉄製品は、直径12㎝ほどの円形のものである。鉄錆が大量に付着しており、原形を捉えにくい状態である。そのため、元々の性格は不明であるが、中心部に突起状のものが見られるため、経筒の蓋や門扉の金具などが可能性として挙げられる。



第32図　ＳＫ575出土遺物実測図（1/4）

ＳＫ553（第33図・図版11）

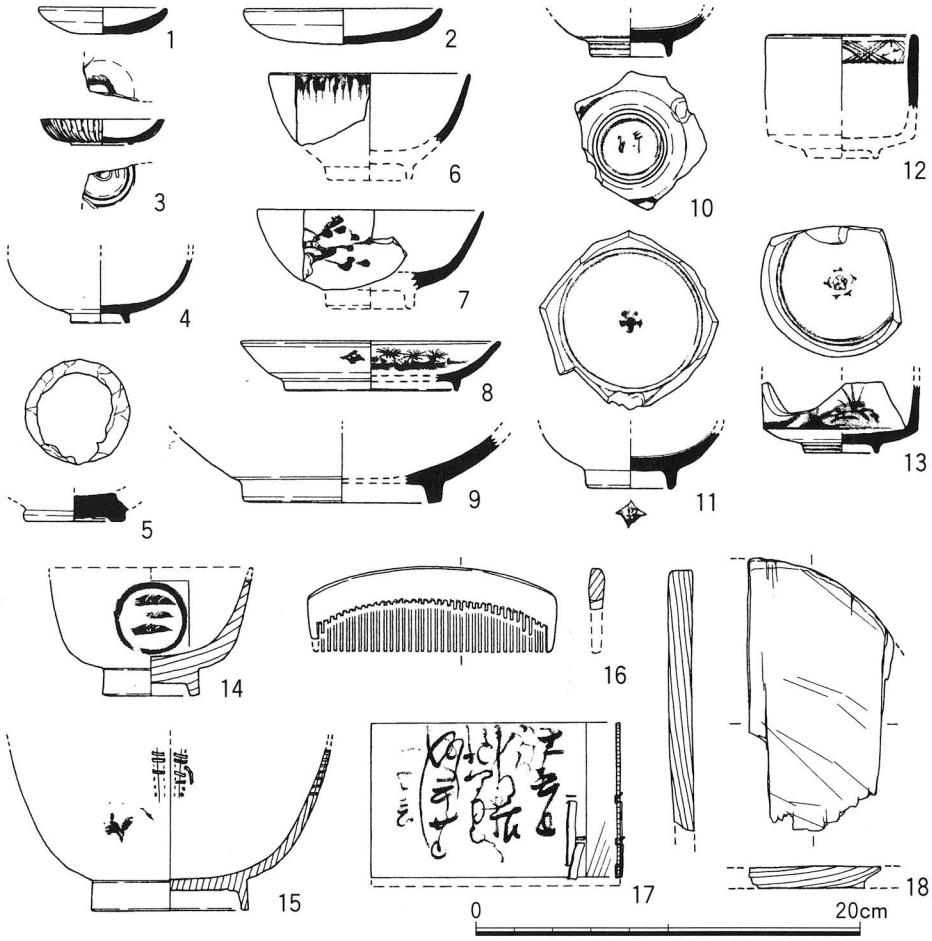
ＳＫ553の出土遺物は、瓦質鉢・土師器皿・石臼である。瓦質鉢（１）は脚付きのものである。脚は三方向に付けられており、面取りを施すなど丁寧な作りをしている。土師器皿（２）は前述の遺構のものと同様に、15世紀後半頃のものである。石臼（３）は前述の通り、ＳＸ300で出土したものと同形のものである。ＳＫ553のものも擦り合わせ面の一部が残存している。



第33図　ＳＫ553出土遺物実測図（1/4）

ＳＸ530（第34図･図版14）

ＳＸ530の出土遺物は、土師器皿･陶磁器･漆器椀・櫛・曲げ物などである。土師器皿（１・２）は、これまで述べてきた南半の遺構出土のものよりも若干新しく、16世紀半ば以降のものである。陶磁器（３～13）は肥前産のもの（伊万里・唐津）がその大半を占めているが、波佐見も見られる。器種構成は皿・椀を主体としている。



第34図　ＳＸ530出土遺物実測図（1/4）

陶磁器については、出土点数が多かったため、一部を図化した。３は軟質の施釉陶器であり、外面は型押しにより成型をしている。４は丸椀であり、高台部分を除いて施釉されている。５は唐津と考えられる椀であり、高台部のみが残存している。意図的に上部を打ち欠いたような痕跡が見られる。６～８・10～13はいずれも染付椀である。７は「くらわんか」と呼ばれるご飯茶碗である。12・13は筒茶碗であり、現在の湯呑みに相当する。９については陶器皿であり、高台の畳付以外を除いて施釉されている。漆器椀（14・15）は汁椀である。櫛（16）は残存状態があまり良好ではないが、ＳＸ530において食器以外の生活用品が出土したということを示す貴重な遺物である。曲げ物（17･18）については、17の表面には墨書が見られるが、何と書かれているのかは現時点では不明である。18は、調査区北半のＳＥ118の出土遺物でも見られた円形の曲げ物である。陶磁器及び漆器椀など木製品については、いずれも17世紀後半から18世紀半ば頃のものと考えられる。今回図化をしなかった出土遺物についてもその多くは陶質の人形や土人形・土鈴・陶磁器など江戸時代のものであり、池としての利用を終えた際に、不要となった生活用品を廃棄した可能性が高いと考えられる。

Ⅲ　まとめ

今回の調査において、中近世期における桜井駅跡遺跡の全容を知る手がかりを得たので、以下にその成果及びそれに基づいた考察を行うこととする。

まず、遺構面の存続時期については、北半では出土遺物により、15世紀後半から16世紀前半に該当することがわかった。遺構を伴わない遺物として、弥生時代後期に該当する甕が出土したが、これについては遺構面を検出しなかった。弥生土器の残存状態が比較的良好であったことから、土器そのものの長距離移動はなかったと思われる。桜井駅跡遺跡の北西に広がる、弥生時代に相当する桜井遺跡の遺構面が、より広範囲に及び断続的に存在する可能性も今後考えていく必要があるだろう。

南半では、13世紀前半から19世紀前半までの６世紀間に相当する遺物が出土した。今回の調査遺構面は15世紀後半から16世紀前半のものと思われるが、部分的に強く人力掘削を行い調査面の下層遺構面を検出している。しかし、13世紀、15世紀～16世紀前半、17世紀後半～19世紀前半に相当する遺物は出土したが、14世紀及び16世紀後半～17世紀前半に相当する遺物は出土しなかったことから、当該地における土地利用が断続的であったことが判明した。当該地は桜井駅跡遺跡の包蔵地であるが、桜井駅跡として比定される根拠となっている楠木正成・正行父子訣別の伝承の年代である14世紀前半の遺物は出土しなかったことから、少なくとも今回の調査地において「桜井駅」が存在した可能性は低いと考えている。それに加え、今回の調査地近辺に存在したとされている大原駅についても、駅の成立時期である平安時代初め頃の遺物が見られなかったため、今回の調査地に存在した可能性は低い。

検出遺構から見て取れる調査成果としては、調査区北半・南半ともに複数の井戸を検出したことから、現在と同様、中近世期においても調査地周辺は人々の水源として適した地であったことが窺える。それに加えて、南半で検出した池であると考えているＳＸ530の存在も、水に恵まれた土地であったことを示している。調査区南半中央部における大型柱列については前述の通り、柱間距離が西から３ｍ・３ｍ・４ｍと均一でないこと、直交方向に柱穴を検出しなかったことを踏まえると建物であった可能性はないに等しい。しかし礎盤石として用いられている石はかなり安定感のあるものであり、石の大きさから直径30㎝程度の柱が立てられていたと想定できる。居住空間を仕切るための塀や神社の鳥居など、建物以外で安定感を要する施設であると考えられるが、いずれにしてもそれがどのような性格のものであるのかを確定付ける要素がないため、詳細については不明である。今回の報告はあくまで概要であり、それぞれの遺構・遺物についてはまだまだ検討の余地があるので、今後類似する調査事例を調べ、検討を加えていきたい。

図　　版

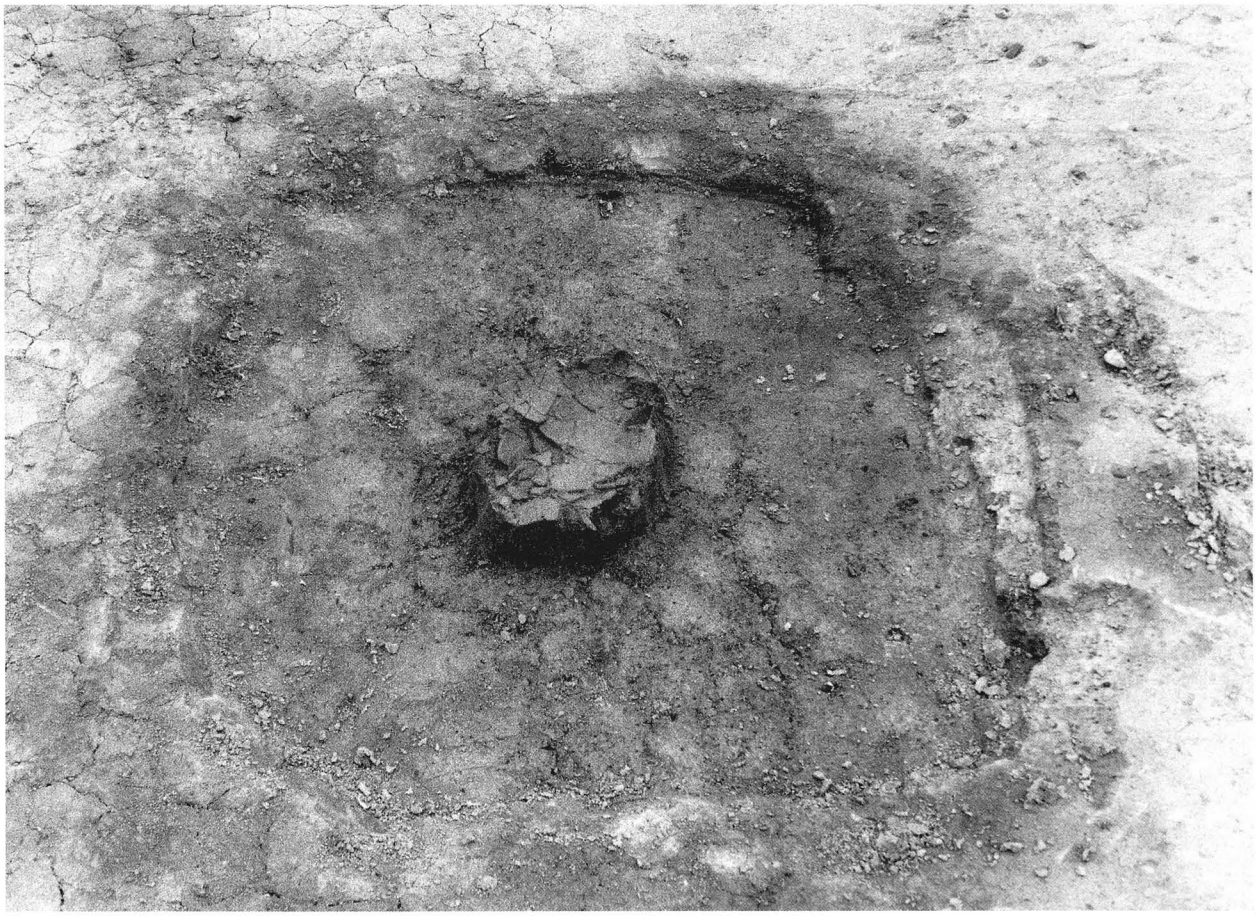
図版1　調査区北半全景・ＳＸ３００

調査区北半全景（西から）

ＳＸ300（南から）

ＳＸ300 石臼出土状況（南から）

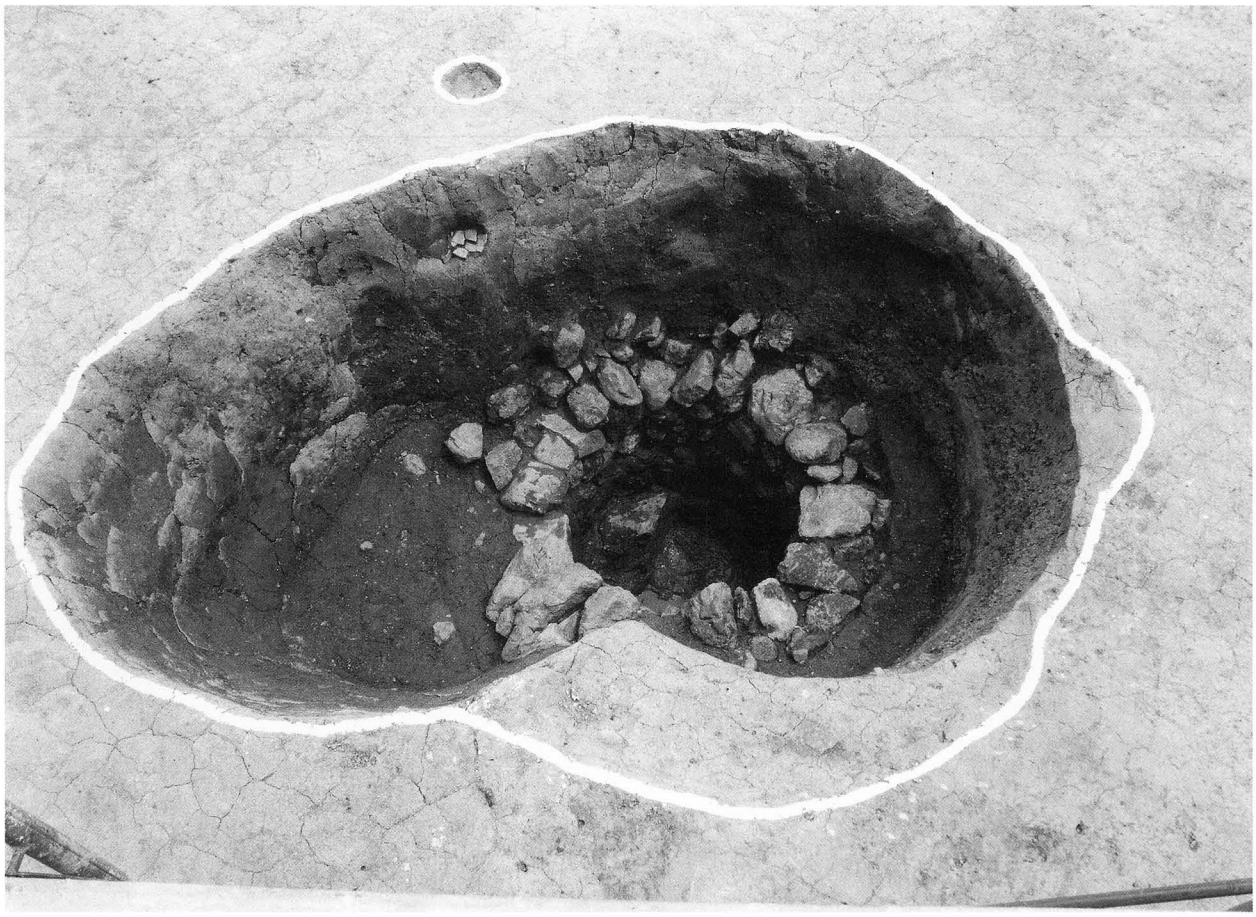
図版2　弥生土器出土状況・SE118



弥生土器出土状況（南から）

ＳＥ118（東から）

図版3　SE174・SE211

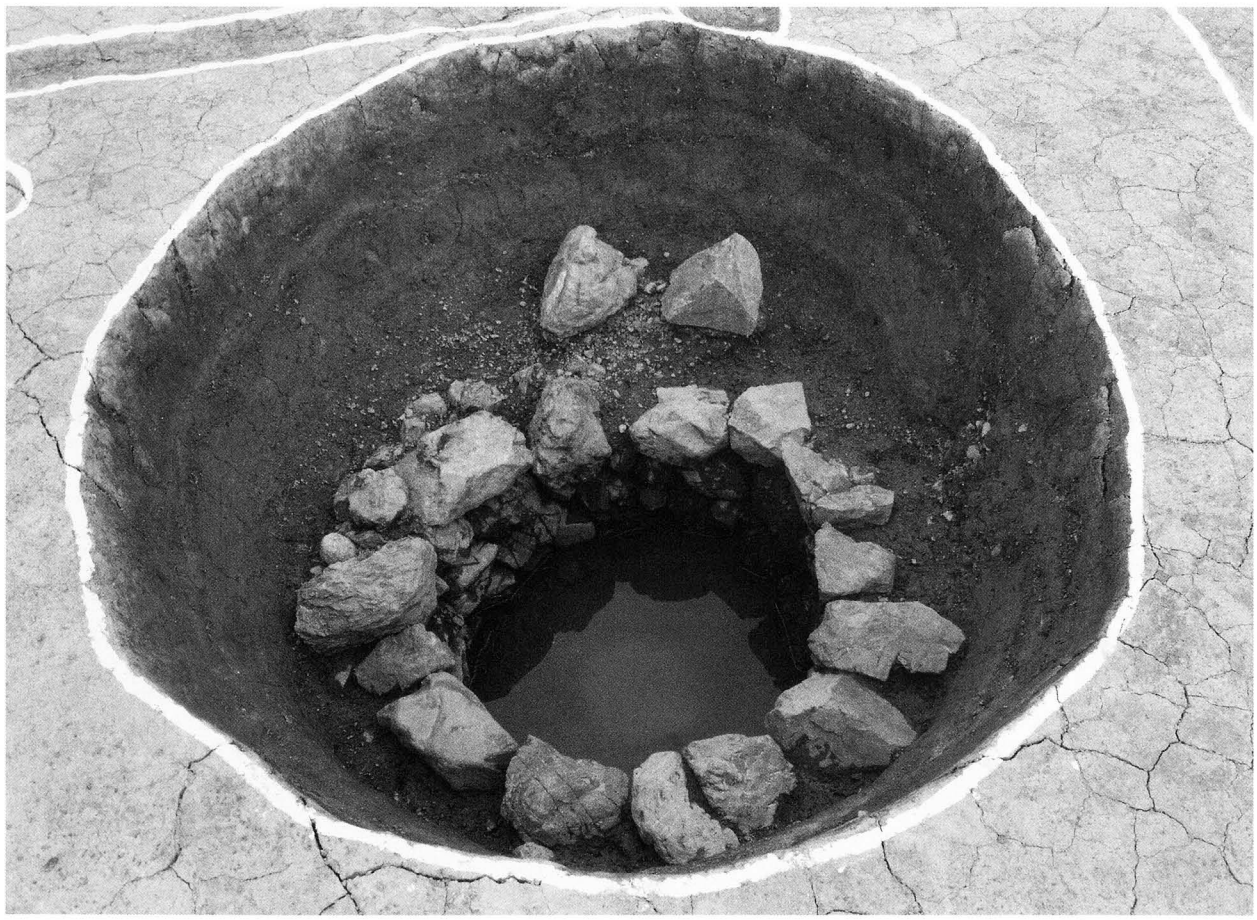


ＳＥ174（西から）

ＳＥ211（南から）

図版4　調査区南半全景・SE543

調査区南半全景（西から）



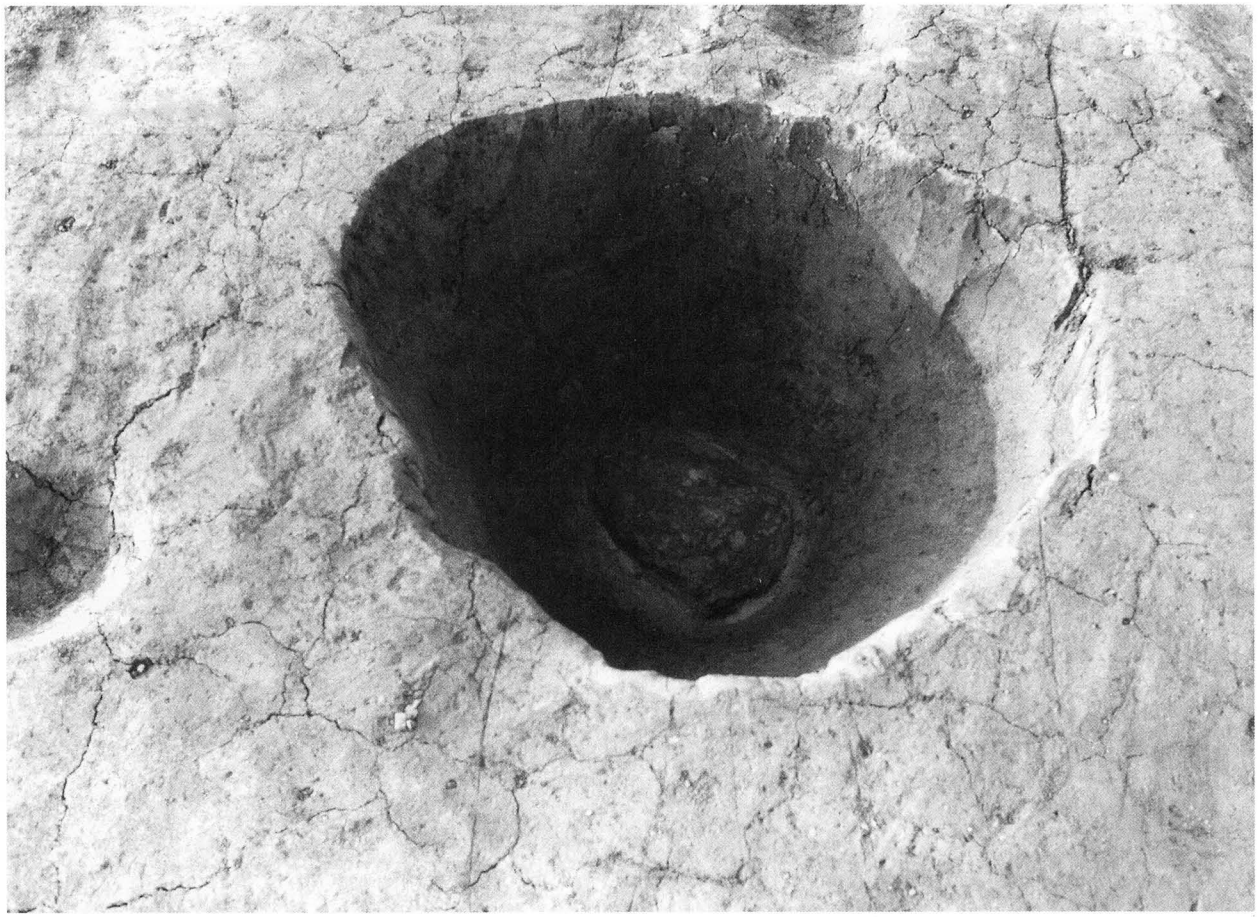
ＳＥ543（西から）

図版5　SK553・SD544

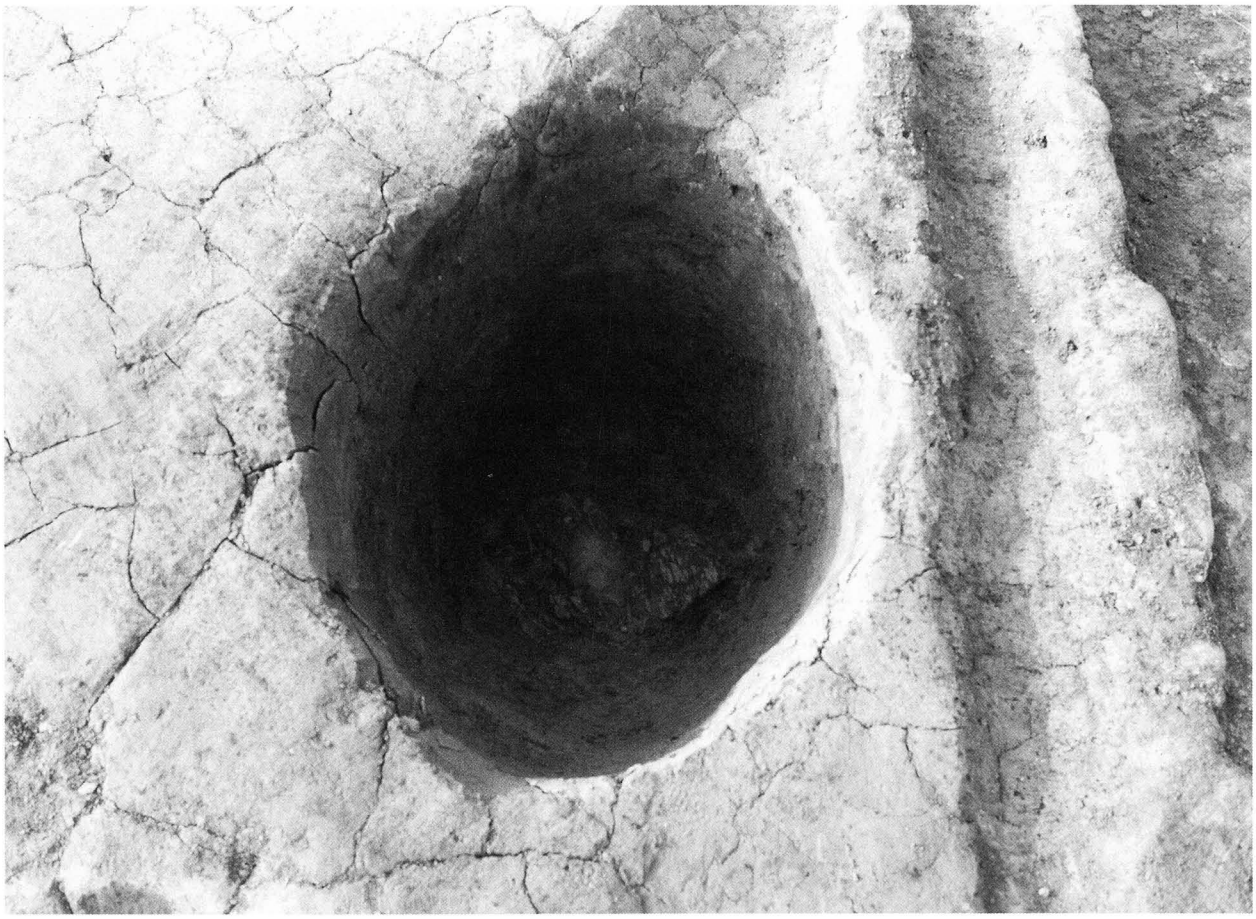
ＳＫ553（南から）

ＳＤ544（南から）

図版6　大型柱列（P513・P521）

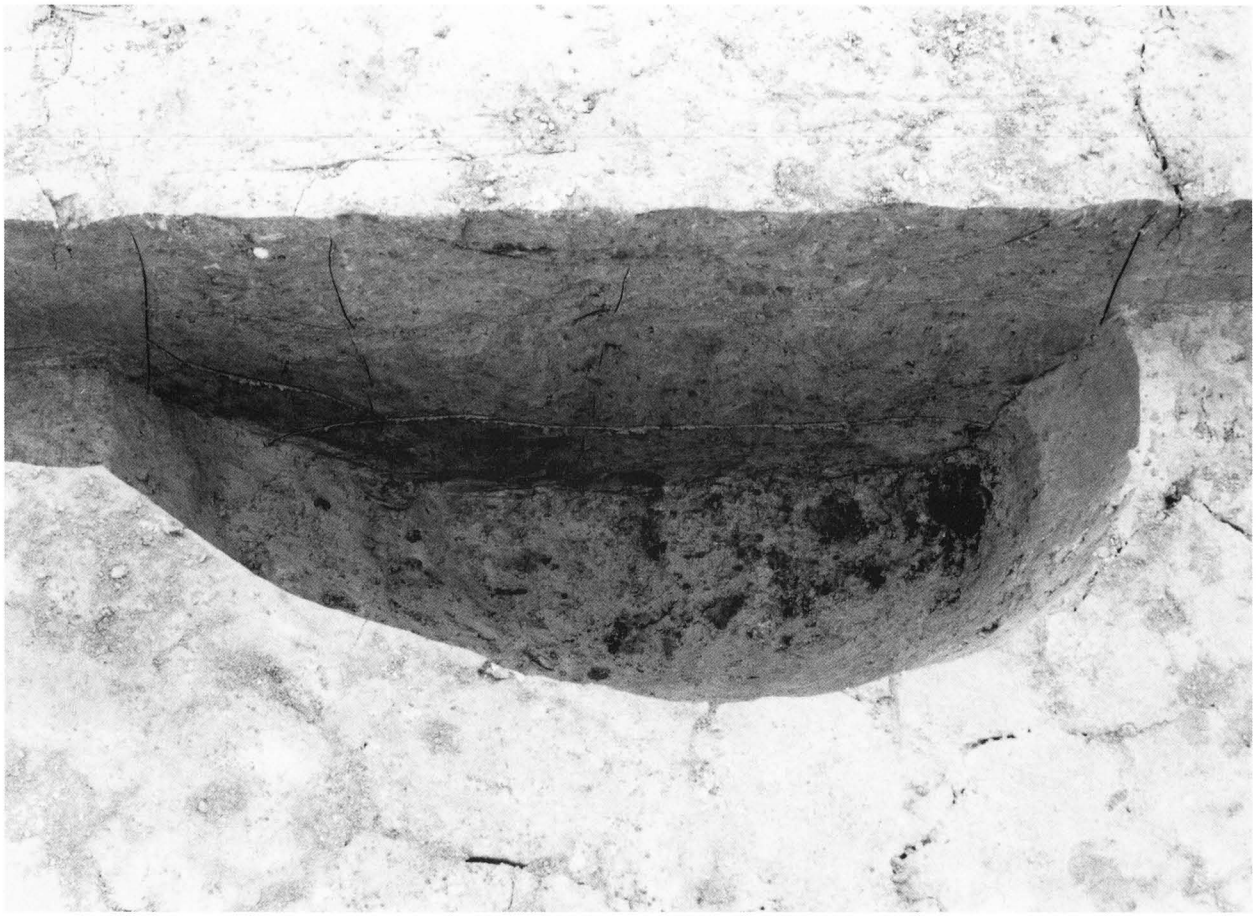


P513（南から）



P521（南から）

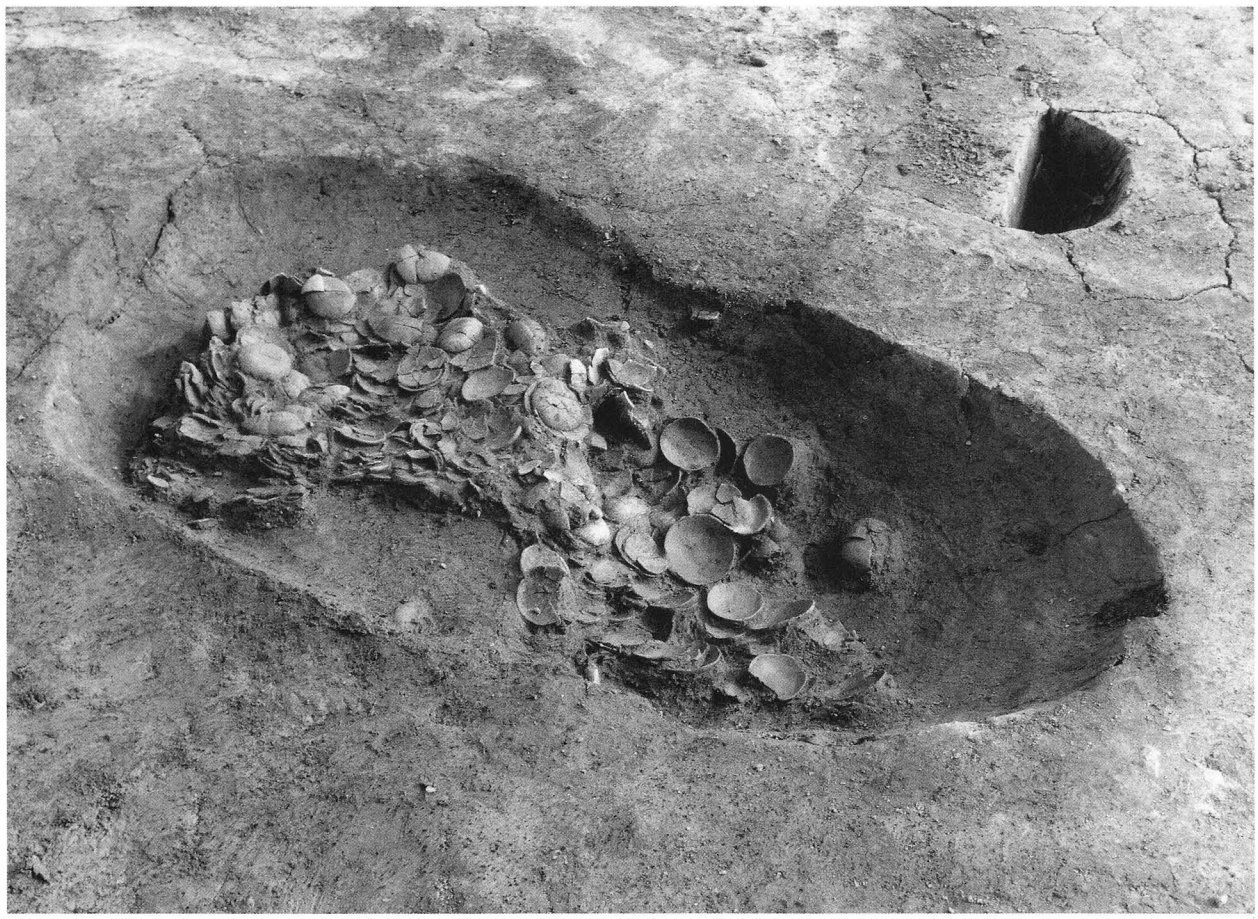
図版7　大型柱列（P574・P551）



P 574（南から）

P 551（南から）

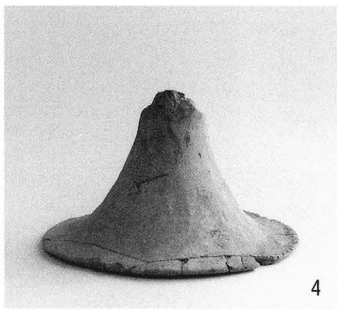
図版8　SK575

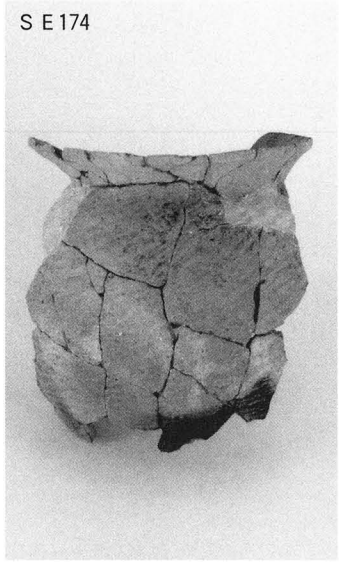


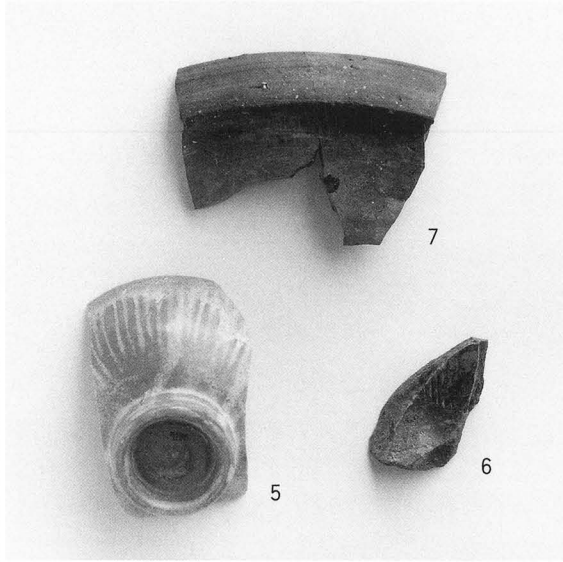
ＳＫ575 土師皿出土状況（北から）

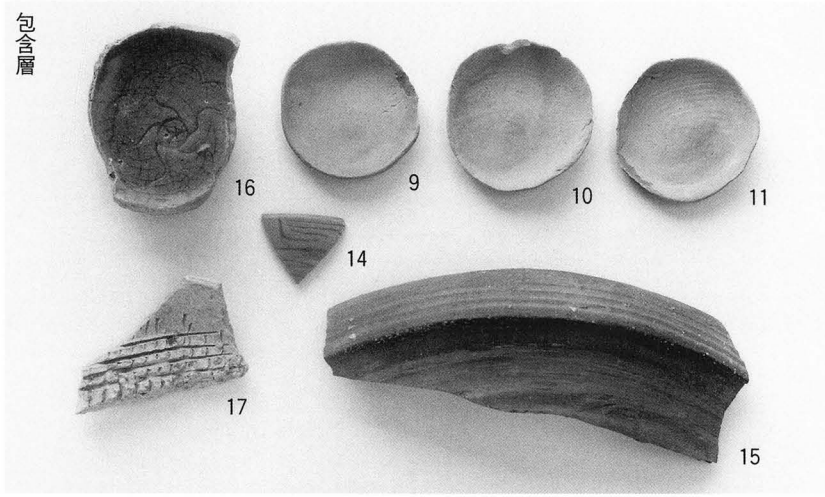
ＳＫ575 鉄製品出土状況（北から）

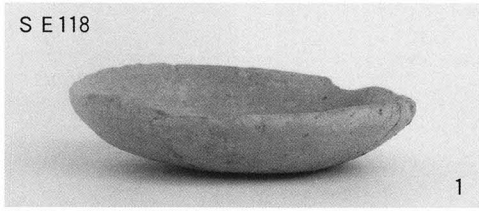
図版9　SE118・SE174・SE211・SX217・SX300・包含層出土遺物

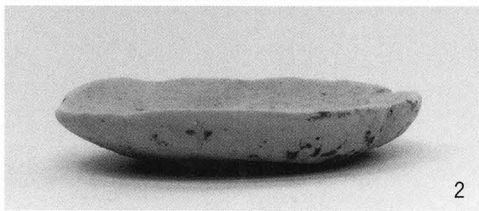


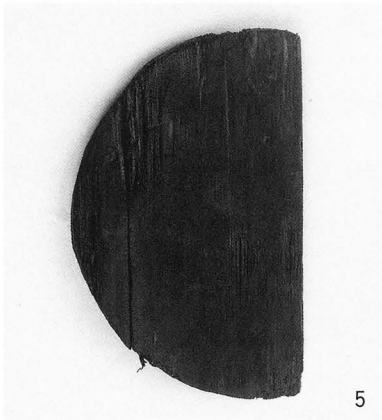


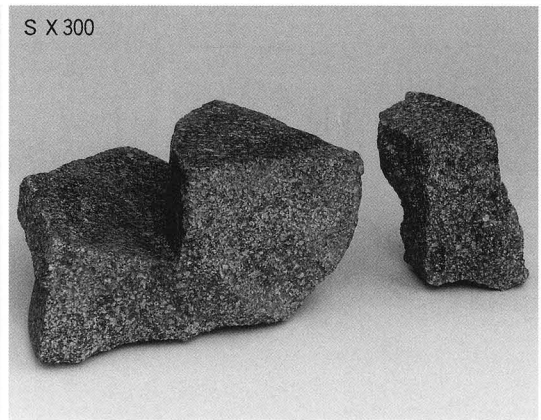




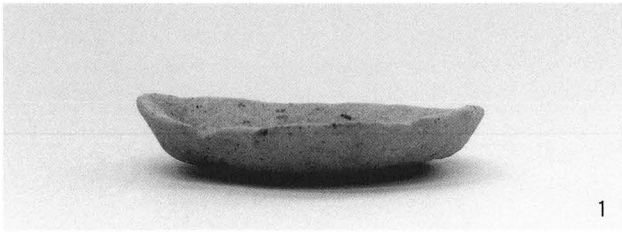


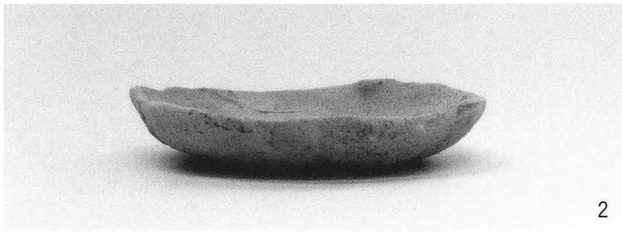


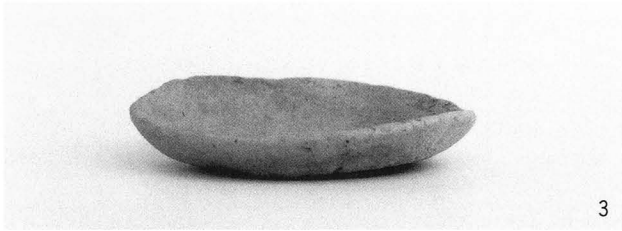


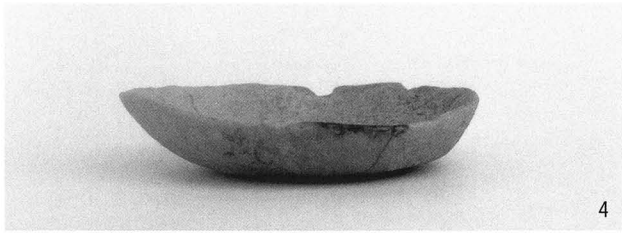


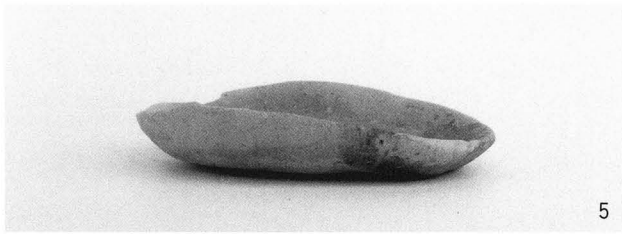
図版10　SD544出土遺物


1


2

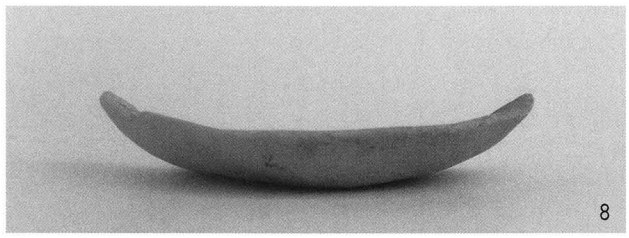

3

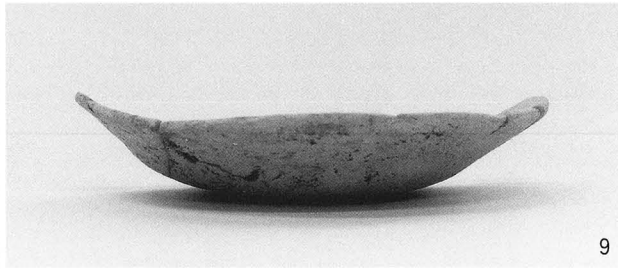

4


5

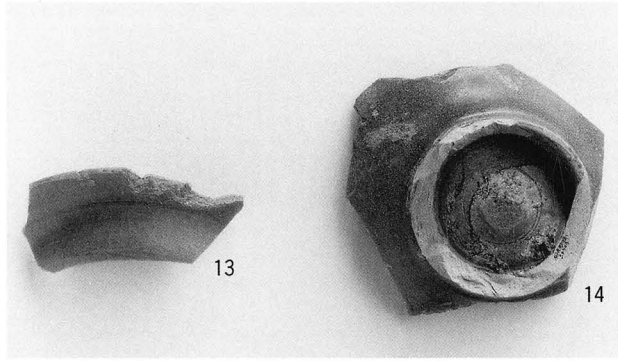
6

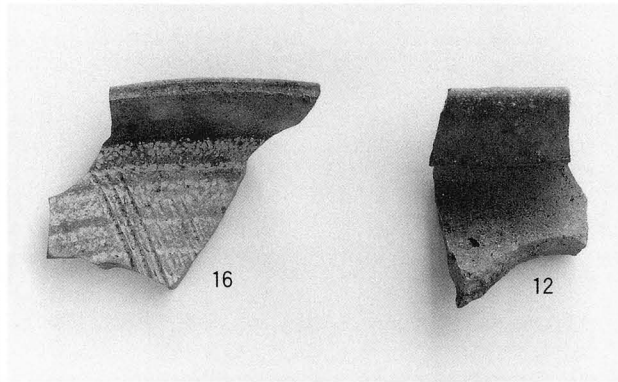
7

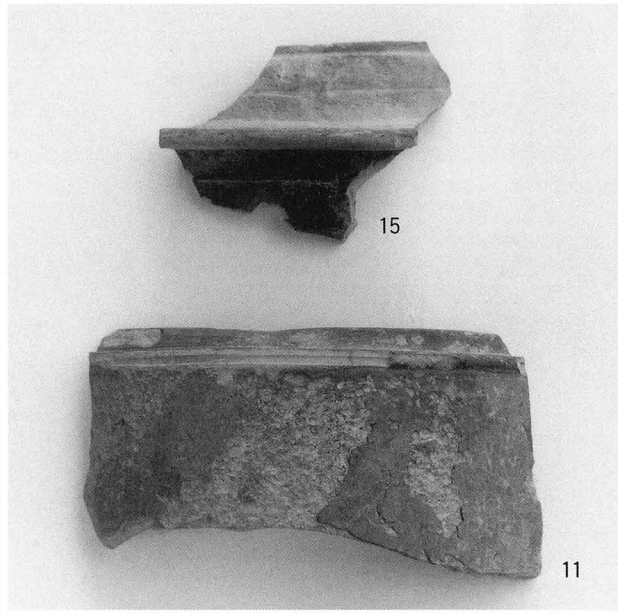

8


9

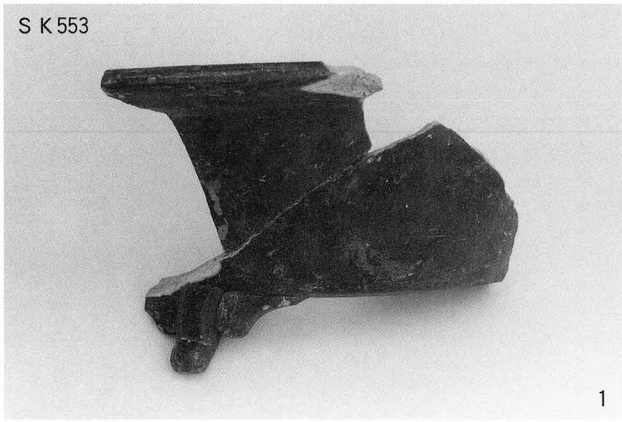
10

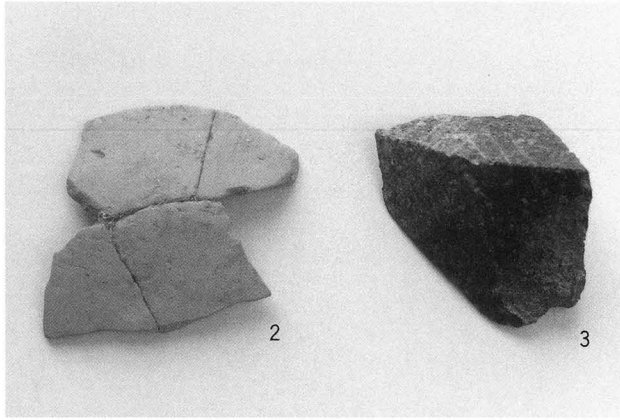

13
14

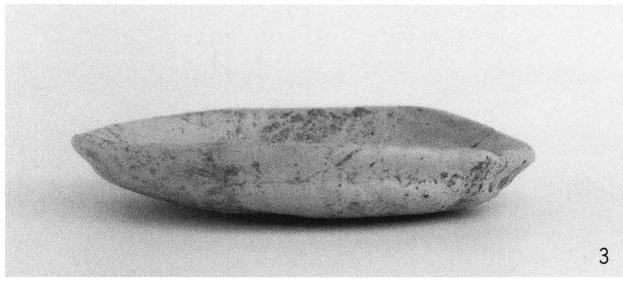

16
12

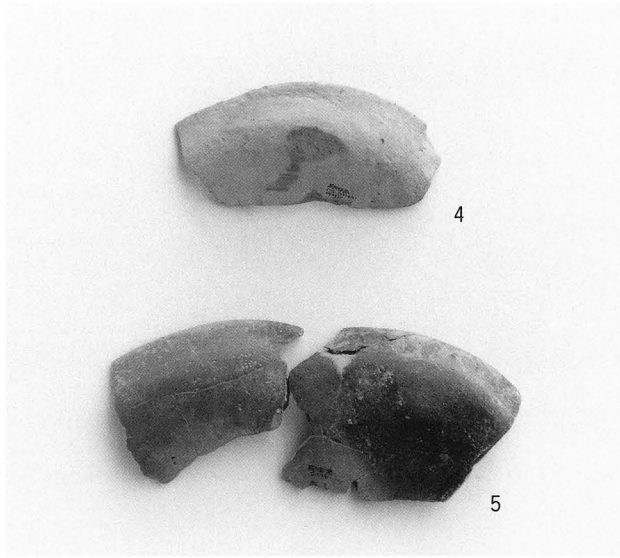

15
11

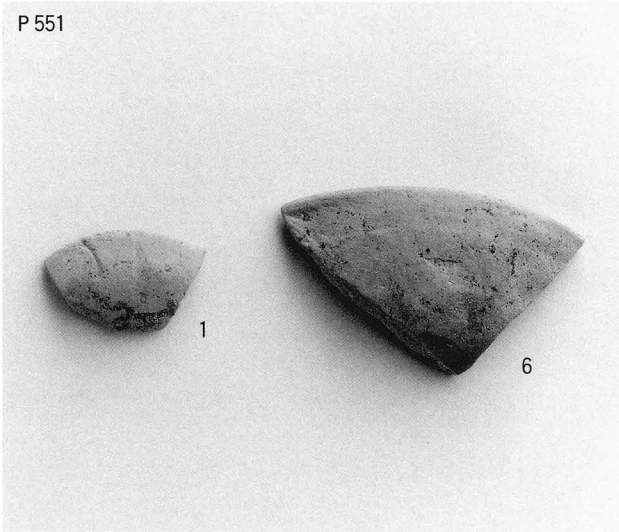
図版11　SK553・大型柱列（P551・P574）・P581出土遺物



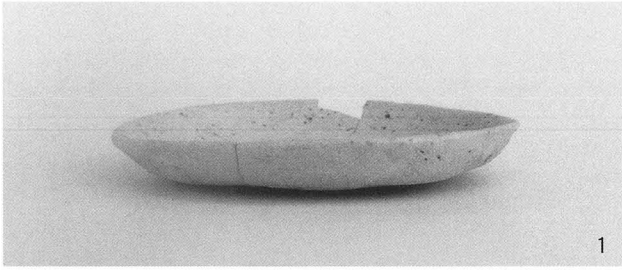


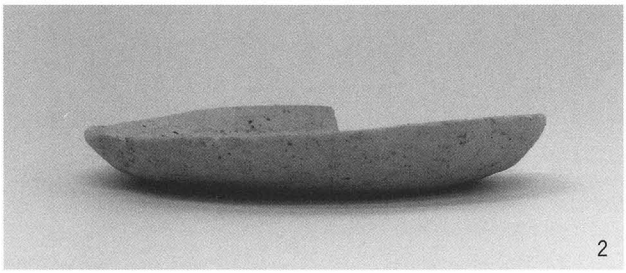


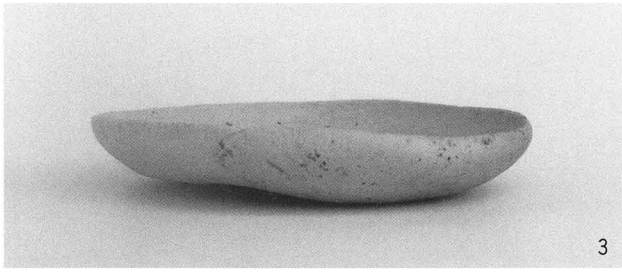


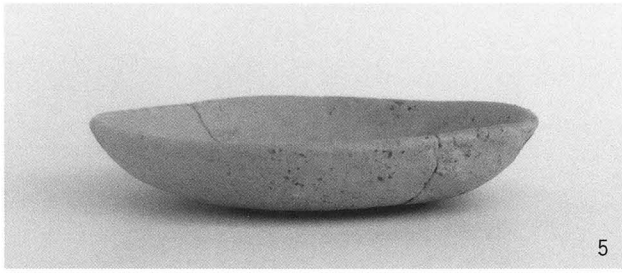


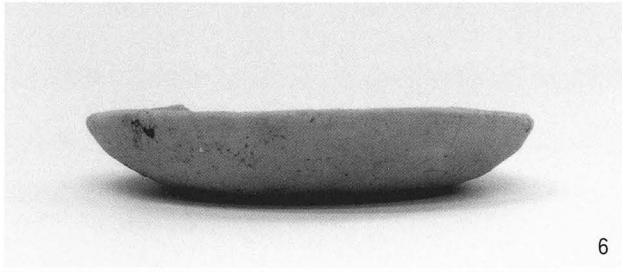
図版12　SK630出土遺物

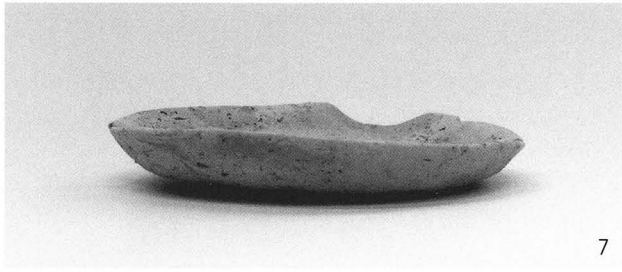

1


2

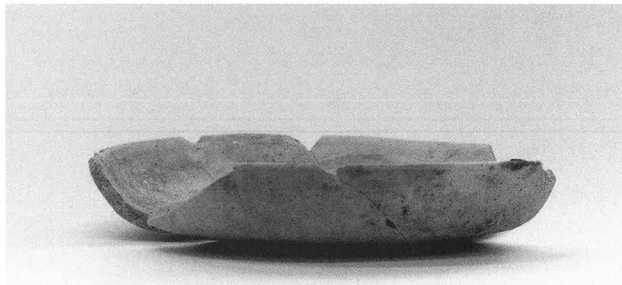

3

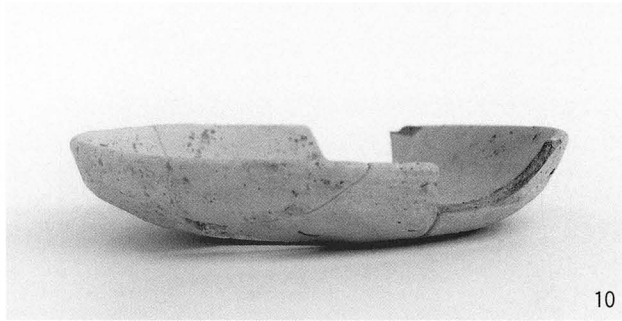

5


6


7

8


9


10

11

12

4

図版13　SK630出土遺物

13

14

15

16

17

18

19

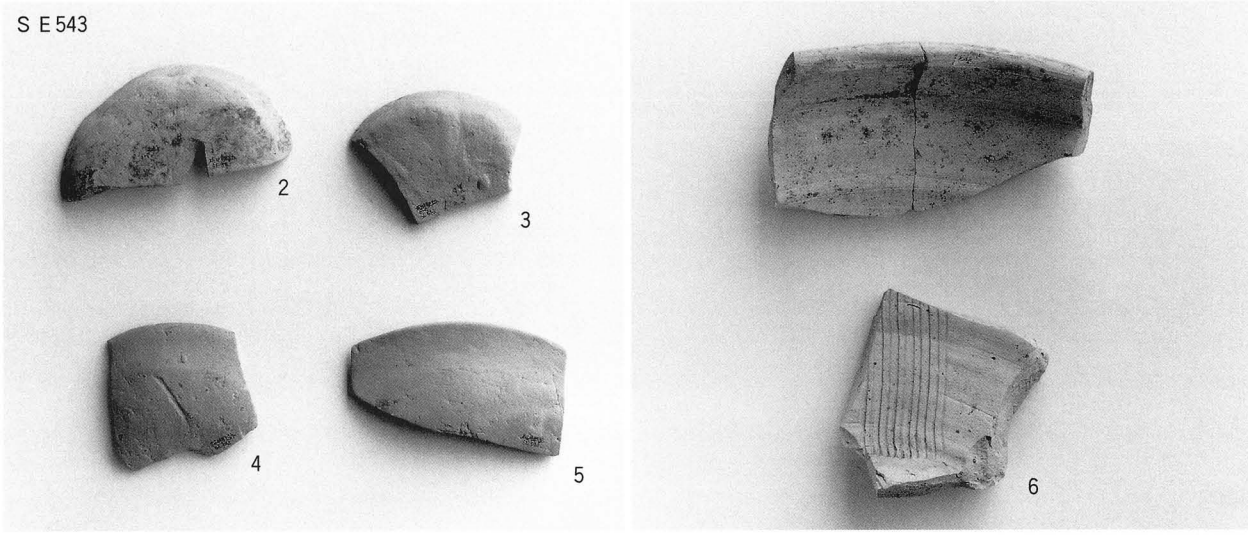
20

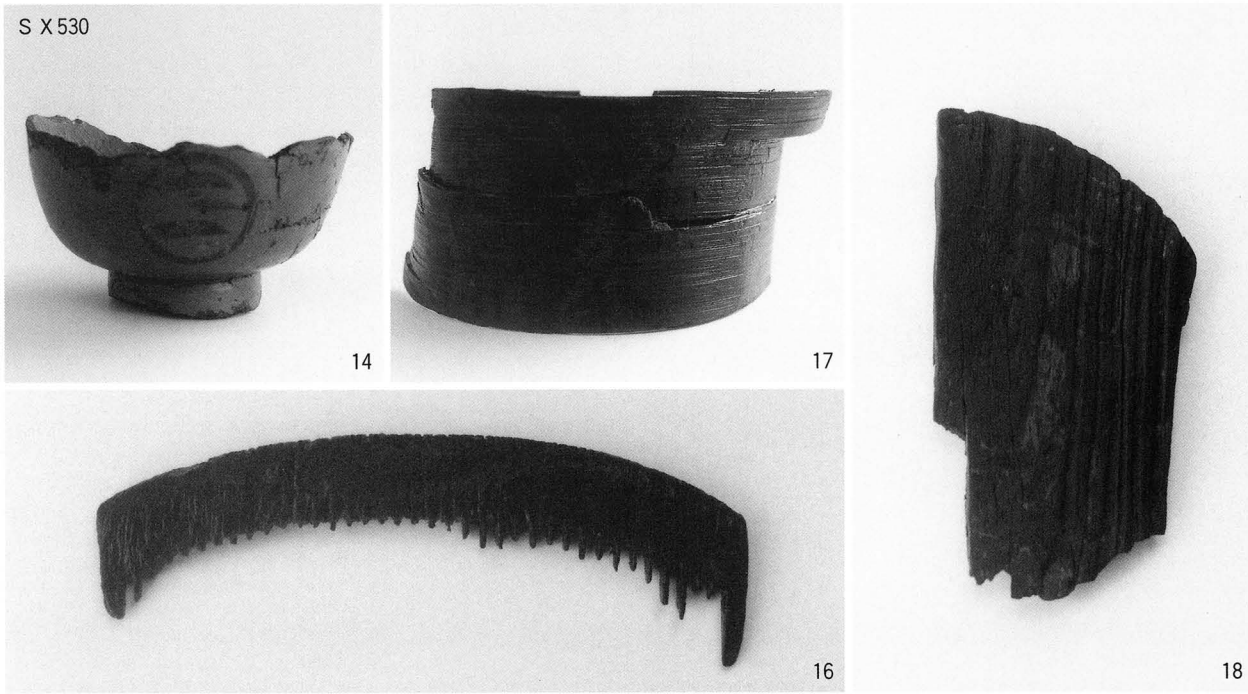
22

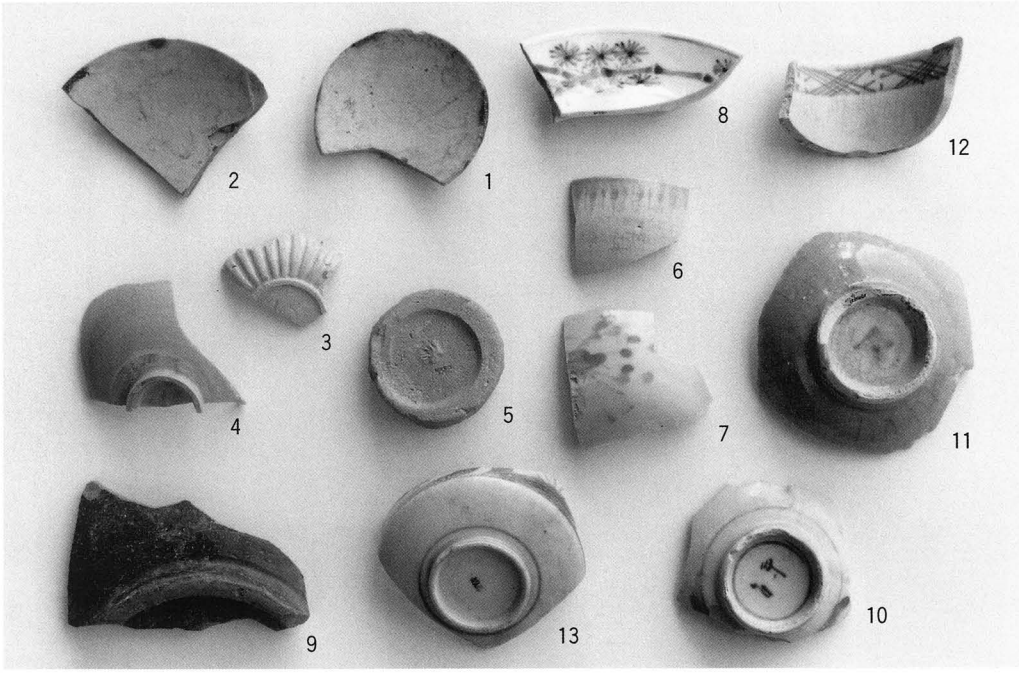
21

23

図版14　SE543・SX530出土遺物

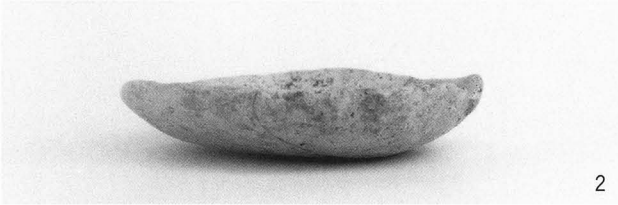


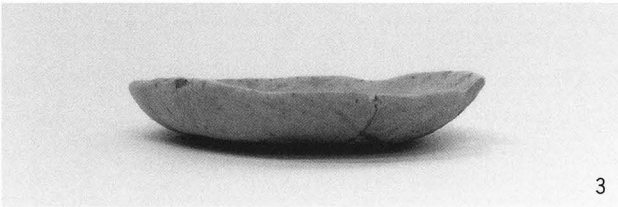




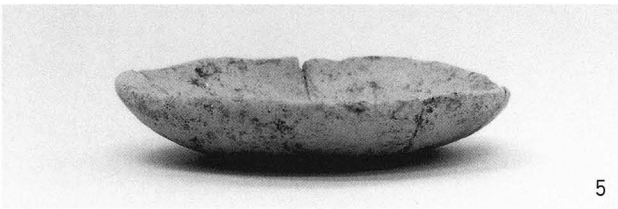
図版15　SK575出土遺物

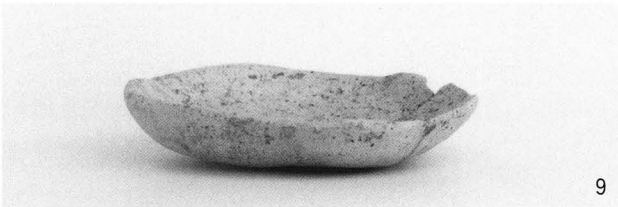
1

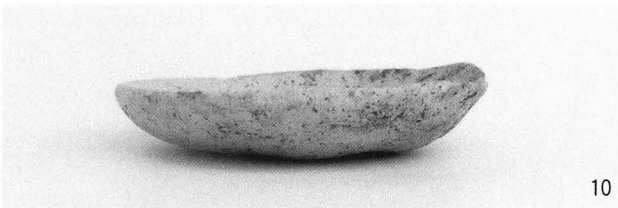

2


3

4


5


9


10

12

6

17

21

22

23

24

25

26

報 告 書 抄 録

ふりがな	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	平成17年度都市計画道路桜井駅跡線（駅前広場）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第９集
編著者名	中津　梓　　久保直子　　坂根　瞬　　吉村光子
編集機関	島本町教育委員会事務局　社会教育課
所在地	〒618-8570　大阪府三島郡島本町桜井二丁目１番１号　℡075-961-5151
発行年月日	平成18年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
遺跡範囲								
桜井駅跡遺跡（さくらいえきあとせき）	島本町桜井（しまもとちょうさくらい） 一丁目地先	27301	6	34° 52′ 38″	135° 39′ 59″	2005．5．10 ～ 2005．8．5	1,600	ＪＲ新駅 駅前整備

島本町文化財調査報告書
第9集

発　行　　島本町教育委員会
〒618-8570　大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号
TEL 075-961-5151
発行日　　平成18年3月31日
印　刷　　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300
TEL 075-256-0961